源氏物語は、中世の文学・芸術に多大な影響を及ぼした。とりわけ連歌が盛んになり、地方にまで広まるよう、連歌を詠む上で源氏物語の知識を求めめる人が増大した。しかしながら、源氏の武家など限られており、それゆえ大多数の人々の需要に応えるため、源氏の梗概書が数多く作成された。その中で最も流布したのが、南北朝期に成立した『源氏小鏡』である。本书は江戸時代になっても重宝され、幾度も版を重ねた。にもかかわらず、版本『源氏小鏡』は今のところ、影印も翻刻もない。そこで本稿では数ある整版のうち、最善本を選び翻刻し、また版本の挿し絵についても言及する次第である。

整版『源氏小鏡』の本文系統、以下『小鏡』と称す。の版本は、古活字版と整版とに大別され、古活字版はさらに嵯峨本など版により八種類に分かれるが、いずれも本文は同一と見なされていた。しかしながら、三系統の本文に分類できることである。吉田幸一氏は次の十一種に分類された。
一、整版正文本
二、整版絵入本（絵画本）

第一類 上方版大本
第二類 上方版小本
第三類 加賀屋相版
第三類 加賀屋相版

明治三年刊安田兵衛版
文政六年版小本
文政六年版小本

慶安四年刊秋田屋版
三巻三冊

書式年版薄縁小本
三巻三冊
記の（注）は版元の名にちなんや徳尾屋版、他は初版が刊行された年号を呼ぶことにする。ちなみに出版された順に下、三巻を取り上げる。まず少女の巻を見る。新築した六院の秋の御殿の前で、文脈が不自然な箇所がある。今に「一」を付けた部分は秋好女御の説明文であり、その一部がなければ、二巻の御やしなじめ御むしめねば、はし、ひつし

（上略）梅つぼの女御と申、六条の宮すら所の御むしめ、けんしの御やしなじめ御むしめとなる。此女御の君、秋の夕しめ給へ、秋の秋をこむ中宮、

冷泉院のききき共ふふ。つとときよるべ、を、を、を、を。

（整版の本文は慶安版による。以下、同じ）

次に玉鬘の巻の衣服が、慶安版の説明文で、文脈が不自然な箇所がある。

（注）文脈のひとつは「一」で、小花の通りは、赤梅のいといたぐと唐突に始まり、文脈が不自然な箇所がある。

又、きぬくはりといふ事あり。で始まり、各人の衣服と寄合の詞を列挙し、源のセリフはない。

最後に浮舟の巻において、古活字版と慶安版を比較すると、他者はなにか所、長文が抜けている。以下、古活字版には不自然な点はなく、
へは、かすみのたへくに、木へはかりを見える。山は、かすみをかけたるやうに、きらくとて、ゆ
みつ、雪のみちはこほりふみみて君にそまるよて道はまつはす
ほたるに、ゆきをおしろきためしに雲事也。これも宇治河よりおちの事ならへ、とりわかで付へし。こ
らは春也。「春のゆき」などとし。B

その後、かほる大将のおはするに、そらをそろしくはつかしくて、うちしつまりて居給へるを、大将は、「ま
とをなるを、さらぬやうにて心くるしく、こよなくもてつけてあるか」と、心まさりして、あはれもふかくお
しめし、つるたちこけのつるけ日と、もろとも、はしちかくうちふして、Cなかめいたきたまへは、おとこ
は過しかたの事をおもひいたして、かたみに物をおもへし。山の方はかすみへたて、さむきささきにたてる
きしも、も々はいとおかしう見えたる。しばつれも、こりかこびに行ちかふなど、ぼのこにして、めなれぬ事
のきなさみも、此世のみかはと、たゝあわれて、恋しかなさと、おりたれなど、つねにあひ見ぬほの
くらしさを、さまよき程にうちからひて、D歌に、

宇ちはしのなかちきはたへせとあやふかたにこゝろはくさな
と、よみなり。されは、「かさりき」「しはふね」など、「宇ち」に付へし。かくて、二日三日すきて帰り給
うと丁の裏に当たり、かつAでも前が「付べし」とあることに基づき、「目移りのため脱落した」と見る
ふに、おもかえも、いとおこましくおほえり。
能性は低い。しかしながら、欠文の中で傍線を付した一節（寒さの時）は寄合の詞で、たとえば二条長を、笛文版は欠いており、この一節がなく文意が通じない。また明暦版では行頭の六字分（の部分）が空白で、慶安版も行頭が五字分としている。一方、延宝版と須原屋版には空白はない。従って慶安版の空白部分を明暦版は受け継ぎ、延宝版と須原屋版は文意を連絡する。手なら一の君の心中さこそ有る御返事にいかにそやあき、慶安版でも文意は通じない。延宝版と須原屋版には空白はない。
かたくせし姫君、ほたる兵部卿の宮の（北の）かたに成しを
において、延宝版は（）内の文字を欠く。このような脱字が、他にも散在する。
また延宝版は、慶安版の本文を元に版が組まれたと推定される。その根拠を一例示すと、慶安版の箋の巻には、
行脚に五字分の空白がある。それは、次の*の箋所で、その前後は文脈が続いており、欠文の可能性は考えられない。

① かつての親王を見えし人は、清和天王第五の御子、ひわの上手としか。これを、きりつつほののみと

二、整版と写本の比較

伊井春樹氏は「小鏡」の写本を六十本余り調査された結果、第一系統（古本系）を元に作成されたこと、また版本に関しては古活字版は第一系統、整版は第二系統に属

せざる第一系統（古本系）を元に作成されたこと、また版本に関しては古活字版は第一系統、整版は第二系統に属

するのを明らかにされた。ただし写本の第二系統は、さらに三系統に細分化されたが、整版がどの類に所属する
第二系統の諸本は、歌・本文などにおいて青表紙本で訂正された改訂本だが、（中略）同じ改訂本系であっても異文を一部有する諸本を第二類とし、これに対してさらに後人によって改訂作業の進められたのを第三類とする。これには一度大改訂がなされた後、所持者や書写者によって訂正され続けたことを示している。

先にも述べたように、改訂本系になるが「夫生死無常云々」の抜文が残されているのが普通のようだが、「源氏小鏡」（東京大学図書館蔵）と「源氏要文抄」（京都大学文学部蔵）の岩経注、この二本は第一類に近いと考えられる。特に第一類に位置づけるには左右の説をまとめて、抜文があるのは第一類のみで、第二類は残念ながら第二類に近いことからみて、むしろ抜文が削除された伝本であることを示している。伊井氏が提示された唯一の具体例として改訂本系のもう一つの特徴としては第三類に比べて歌数の減少である。改訂本系の神宮文庫本は一二九首、同じく書陵部では一二三首、それに比較して慶安版の数が多い。}

それに続き、「古本系」の一〇九首であるのに対し、改訂本系の神宮文庫本は一二九首、同じく書陵部では一二三首と、古本系に比べて一二〇首ほど多くなっている。歌数を含め登場人物の説明の点数を考慮すると、確かに第二類の書陵部本は一二三首あるが、第二類の神宮文庫本は一二九首、同じく書陵部では一二三首と、古本系に比べて一二〇首ほど多くなっている。
三、版本『小鏡』の拡し絵
(1) 他作品の流用

本節からは、版本『小鏡』の拡し絵を問題にする。絵入本の版本は整版の八件にあり、それそれぞれ吉田氏は四種類に分類された（第一節、参照）。そのうち第二類は寛政版・寛延版・文政版三種もあるが、図様はすべて同じである。

そこで以下、第一類を明歴版、第二類を寛文版、第三類を延宝版、第四類を修原版と呼ぶことにし、本節では第一・四類から取り上げる。というのは両者とも、他の作品の拡し絵を転用しているからである。

まず修原版は『小鏡』を便観化した『源氏鏡』（以下『鏡部』と称す）の図柄を流用している（同書、上三九一頁）。『鏡部』の解本は本版と江戸版に分かれ（同書、上三九一頁）、両者とも『鏡部』は大本であるのに対して、修原版は中本で大きな差異があるもの、大本の拡し絵は半葉（十二分の三）の下部（全体の三分の一）にしかないため、それほど工業的であるために、修原版の図は中本に収まる。逆に縦の寸法は中本の方が、大本の三分の二より長なので、修原版の図は更に広く空いている。次に延宝版『小鏡』は、それ以前に刊行された明歴版『小鏡』と比較すると、同じ図様に同じ図柄を描かれた図柄の内容は同じ箇所だが、構図その他は必ずしも同じとは限らない（同書、上三九四頁）。
次の図は、問題がある。吉田氏は指摘された（図書、上三六一頁）。順に見ていくと、

第6図（末摘花）末摘花が琴を弾いているところであるべきところ、著を弾いている。あるいは、この部分

において、この箏は瀬田版よりは「おさな源氏」「竹河の巻の方が似ている」（図書1）。「おさな源氏」にも上方版と

江戸版があり、野々口立箏が挿絵（三三一図）を描き、承応四年（一五六五）に著し、寛文元年（一六五三）に出版したのが江戸版である。その絵は菱川師宣の

手になり、全六図と少なくないのをおいて、

手が明細長い。全四図と少なくなっている。箏を比較すると、「十箏源氏」と上方版「おさな源氏」は被影による

と、吉田氏は述べておられる（図書、上三七・二七八頁）問題の絵の場合は、上方版と江戸版では女性の数や衣

裳の模様が異なり、延宝版「小鏡」は江戸版「おさな源氏」を元に少しと貴人に加えたと考えられる。延宝版も

江戸版であるので、同じ所で三年前に出版された方を利用してのものであろう。なお、竹河の巻の舞台は確実に、

それぞれ末摘花の巻に転用すると、末摘花の別巻で源氏が開けたと出会ったところになる。また、延宝版は男性の数

が「おさな源氏」より二人増えており、このうち貴人を加えたのは物語の内容に合うが、少年に関する記述物

語にはない。この件に関しては、第六節で問題にする。

第11図（須磨）

八月五日、源氏が須磨で早国の懐思う図だから、月夜である筞のところで、月が描かれていない
いなだ。
この図は明らかに明暦版『小鏡』より、江戸版『おさな源氏』と一致する（図2）。この場面を吉田氏は八月十
五夜とされたが、そうではなく、その日の夕方、源氏が海の見える場所に出て行っている所と見れば、月が描かれて
いてても構わない。
第29図（横笛）
上方版（岩塚注、明暦版のこと）は、源氏が立姿で薫の遊ぶのを傍観しているのに対して、
座して薫を膝のに抱いている。
本図も江戸版『おさな源氏』の柏木の巻、薫の五十日の祝いと一致する（図3）。吉田氏が作成された延宝版の
『掟絵所在』長者屋敷表（同書、上三六四頁）によると、他の巻に紛れ込んだ絵が二八図あり、この第39図（横笛）
もそのため、横笛の巻の掟絵が柏木の巻の本文に収まることがなる。
第30図（鈴虫）
八月十五夜に源氏、女三の宮の方に赴き、仏前で虫の音を賛する条であるが、上方版（岩塚
注、明暦版）において既に十五夜の月を描かず、鶴屋版（岩塚注、延宝版）はさらに、仏前までも描いていない。
本図も江戸版『おさな源氏』の梅枝の巻にあり（図4），本来は明石の姫君の入内に備えて、
源氏や草子を書い
ている巻である。それを延宝版は別の巻に置いたため、解りにくくなってしまった。一つ前の第29図は柏木の巻、
第31図は夕霧の巻であるので、この第30図はその間の巻（横笛か鈴虫）になる。原稿院から贈られた竹の子を
幼い薫が喰う図　鈴虫の巻（図4-1）と共通する。
で書くという点では延宝版の絵（図4-1）と共通する。
以上は延宝版の挿絵（全四図）で明暦版と図様場面が重なる三図のうち、吉田氏が問題点を提議された図である。今度は残りの二図、すなわち明暦版に見えない図様場面で、延宝版が新たに加えたと吉田氏が推定された箇所を取り上げる。それらについては次のようになると思われる。

1. 『紹興源氏物語』挿絵の利用（一図）
2. 『紹興源氏物語』他卷の挿絵の利用（一図）
3. 『十帖源氏』挿絵の流用（一図）

『紹興源氏物語』（以下、『紹興源氏』と称す）とは、山本春正が慶安三年（二六五〇）に跋を付けて出版した絵入本源氏物語で、挿絵は全部で三十六図ある。吉田氏は『紹興源氏』と『十帖源氏』の影響を説かれたが、先の四例がすべて江戸版『おさな源氏』の転用であったように、この一図も全てそれにによる。とえば紅梅の図に関して吉田氏は、明暦本第四図に寄りつつ『紹興源氏』第一図（花宴）の流用か。但し、構図の左右が逆。（同書、上三六三頁）と推測されたが、これは江戸版『おさな源氏』御法の巻と一致する（挿図②）。もう一例だけ示すと、夢浮橋の巻を吉田氏は『十帖源氏』第二図（花宴）の流用か。但し、構図の左右が逆。（同書、上三六三頁）とされが、江戸版『おさな源氏』夕霧の巻は構図の左右のみならず、月の有無をはじめ庭や建物など細部の描画に至るまで延宝版と合致する（挿図③）。

そこで改めて延宝版（全四四図）と江戸版『おさな源氏』（全六四図）を比較すると、前者の絵はすべて後者の絵によることが判明した。そのうち二人を追加した末摘花の巻（前掲、以外は、被影かと思われるほど同じである。)
ちなんだ両本の表紙の寸法は、ほぼ同じである。

延宝版の挿し絵で、江戸版「おさな源氏」の同じ巻の絵を用いたのが二七図。他の巻から利用したのが一図である。末摘花の巻を転用したことを示す。

このうち他の巻の流用であるが、不自然ではない例もある。たとえば「御法→)value→夢橋」で、実際には末摘花のための絵でない。

書体の上に示すのは、江戸版「小鏡」では花散里の屋敷から宇治橋と舟が見えている。それに対して明らかな無理な図の方が多い。末摘花の巻を転用した例は多い。

なお、末摘花の巻は一七図の絵を紹介した結果、物語の内容に合わなくなり解りにくくなってしまった。

四、版本「小鏡」の挿し絵
(2) 他作品の改変

本文と挿絵の板下が小本に見合うように新たに書き直されているが、内容はほとんど変わらない。

四回胡蝶の巻の巻は舟楽（明暦版）と、その翌日の童舞（寛文版）です。
なる。寛文版以前に刊行された挿絵を見ると、「絵入源氏」は両方とも取り上げるが、「十帖源氏」はおさかな源氏が寛文版よりよりも有名な図柄を選択したと言える。このほか両版で、挿絵の場面が違う巻、他に二つある。一つは源氏の巻で、源氏の君から祝儀物を届けられ、女童たちが庭の小松を引いている所、寛文版は元日に源氏が明石の妃君を訪問する巻を挿絵した所である（拡図3）。『絵入源氏』と『十帖源氏』は寛文版と同じ日、寛文版は明石の妃君を訪問する場面を挿絵している。寛文版は寛文版の図柄の方が、寛文版を表す有名人物面である（拡図3）。寛文版と寛文版の図柄との、その相違点について、吉田氏は次の三項目を指摘された（前掲書、「三五九」と同様の小図）

以上の三巻（胡蝶・浮世・初音）において、いずれも寛文版が明動版の絵を選択しなかったのは、寛文版の世界で寛文版の図柄の方が、寛文版を表す有名人物面であったからと考えられる。そのほか寛文版（大本）と寛文版（小本）の相違点について、吉田氏は次の二点を指摘された（前掲書、「三五九」と同様の小図）

その一は、形態である。既述のように、大本挿絵は一図一頁だけではなく、横三行分が詰まった縦長な特異な形態だったが（岩井注、本稿の次節参照）、小本では、一図一頁に戻っている。

その二は、図柄の構図はほぼ大本に変わらない。登場人物の数、背景、車馬の位置など異なっており、機械的な縮小図ではない。
揮し絵に入り込んだ文書中、最も短いのは「調させ給ふ」(箋の巻)で、丁度そこで文章が終っている。その文は「それによらば、水にせば化に、文の区切りのよい所である。従って、わざわざ本文を絵の一部に入れたのは、一文の途中に絵がこないようにしたためと推测される。その後は他の巻名も見られ、たとえば箋の巻は絵が丁の裏にあり、右側に三行分あいているのに、本文は「をぞとひける」(をぞ言ひける)言ふべき、(ないがし、逆に夕霧の巻は丁の表に絵があり、左側に本文が三行あり、前の丁の裏は末尾が七行分空いている。これらは皆、絵の前で文章が終わるようにしたからと考える。）

ちなみに明暦版以後の版本「小鏡」を調べると、いずれも半丁までを絵のスペースに当て、そこに本文を置くことはないものの、雲文版作絵の前葉に空白を設け、明暦版と同じ配慮をしている。それに対して他作品の揮し絵を流用した延宝版と須原版とは、絵の前葉に白はなく、そのため文章の途中に絵がくることも多い。さて明暦版の揮し絵は、すべて上部に広い空間があり、その個所には一面に横線が引かれているだけで、そこを本文を入れても支障はないと考えられる。ただし先に絵を版に彫ると、その横線部分を削り、埋め木をしないと本文が彫れない。それは面倒なので、先に本文を彫り、あらかじめ一巻につき揮し絵用に半丁(厳密には行分)ずつ空けておく絵の前で文章が終わるようにしたのが、止むを得ない場合に絵を置くスペースの上部に本文を入れたと推定できる。

図版の中には「小鏡」に記されていない場面が含まれており、両者は密接に関係しているはずです。それらは行幸・若葉下・椎木の巻であるという吉田氏は指摘された。三鷹の著書『三十五巻』、それは朝顔の巻にも当てはまり、当巻の図は有名な雪斎(ゆきまる)して、すでに十六世紀初期の源氏絵扇面屏風(涂壁の卷)に描かれ、版本の揮絵では「絵入源氏」をはじめ、十帖源氏『おさな源氏』や明暦版・雲文版・延宝版・須原版「小鏡」にも見られる。にかもかわらず、『小鏡』にその情景の記述は一切ない。ということは揮し絵の場面は、『小鏡』本文とは別に選ばれたことになる。
明暦版の拝し絵が依拠した資料に関しては、清原婦久子氏が、土佐派の絵と構図や細部が一致することが多い。若菜上巻の数々の場面は、土佐光吉筆『源氏物語画帖』（京都国立博物館蔵）の構図を逆にした他の細部まで一致する。伝道筆『源氏物語図色紙』（岡崎博物館蔵）の構図を逆にした他の絵に見られる様子との関係を論じたものもある。

六、源氏物語と源氏絵の相違

源氏絵は源氏物語を絵画にしたものであるのに、物語の内容に合わないものが多いためである。それ以前の版画『絵入源氏』『十帖源氏』と異なり、土佐派なにおける垣間見の場面を取り上げる。まず、この役所の物語を所間に引用する。人をつなげ、つれずれなければ、暮のいたう冬明るいにまぎれて、かの小柴塀のほどに立ち出でたまぶ。人々は帰し立ちらず、惟光朝臣とのぞきたまへば、ただこの西面にし、持仏心たたてまつりて行、尾なりけり。

（本文は、小学館・日本古典文学全集による。以下、同じ）

このあと物語は二人の女房、女の子たち、そして若葉の登場を続ける。源氏と惟光だけかというと、そうとは限らない。そこで男性の数（光源氏も含む）に注目して分類すると、次のようになる。

A 大人、一人。
1 源氏物語図扇面絵屏風、室町時代、浄土寺。
2. 源氏物語
3. 源氏物語
4. 源氏物語
5. 源氏物語
6. 源氏物語
7. 源氏物語
8. おさな源氏
9. 源氏物語
10. 源氏物語
11. 源氏物語

A
1. 源氏物語
2. 源氏物語
3. 源氏物語
4. 源氏物語
5. 源氏物語
6. 源氏物語
7. 源氏物語
8. おさな源氏
9. 源氏物語
10. 源氏物語
11. 源氏物語

B
1. 大人
2. 大人
3. 大人
4. 大人
5. 大人
6. 大人
7. 大人
8. 大人
9. 大人
10. 大人
11. 大人

C
1. 明治版
2. 明治版
3. 明治版
4. 明治版
5. 明治版
6. 明治版
7. 明治版
8. 明治版
9. 明治版
10. 明治版
11. 明治版
3 源氏物語絵巻
4 源氏物語
5 倫理師宣画
6 貞享二年（一八八五）刊
7 大人二十一、少年一人。
8 10 源氏物語絵巻、伝狩野永徳筆、宮内庁
9 大人四人、少年一人。
10 源氏物語絵巻、伝狩野永徳筆、宮内庁
11 源氏物語色紙、オーストラリア・メルボルン・ヴィクトリア州立美術館
12 大人二人、少年一人。
13 右記のA・Eのうち、物語本文と一致して問題がないのはBだけで、それ以外を順に見ていく。
14 彩色画ならば、源氏の衣裳を惟光より華麗に描いたりして区別できる。しかしながら静嘉堂文庫（A4）の
15 と著者の源氏（B7）の源氏と惟光は姿などが同じで見分けがつかず、前に立つ方が源氏かと判断
16 する程度である。
17 絵師のテストには、二人と明記されていなかった。たとえば『源氏絵詞』（京都大学蔵）には、「人形
18 とあるだけで、人数は指定されていない。次にCの大人数、少年一人についても三種類の推測が成り立つ。まずAの理由と
19 と同じで、二人のうち何れが
20 源氏であるか明確にするため、従者を少年に描いた。ただしその大人二人で、小道具を使うことにより主従を区別
や、冠と烏帽子の被り分け（B7）でも見分けられる。もっとも光源氏は忍者のため、冠は不適切であるが。

Cの二つめの理由は、物語には書かれていない少年が箱根書には登場するのである。それは室町時代に成立した『源氏最要抄』で、光源氏が少年の姿に変装して出かけたとある。

北山の大覚の僧都をめぐり、『年とけて室の台へたどり出たお侍』（相言ぼし、殿上人車を十四五りよう計に供せ申す）とは逆になり、少年が源氏になる。それから、この記述によると、一つめの理由（家来を少年に描いた）とは逆になり、少年が源氏になる。その後で、よりカジュアルな時代に成立した『源氏物語』の少年は大人の後ろに座っている。しかし、この点はなお明確ではない。

【絵画】

そこで今から述べる三つめの推測が、最も有力かと思われる。それは当時、貴人が少年をお侍に連れる習慣があ

う際、身元を知られないようにするため家来は槍の光のほか、『かかる夕顔ののしるべ』に身を包み、弁当屋を伴い住吉参詣した折には、源氏が随身の愛を示すと推定できる。また光源氏が源氏を伴うと噂される。そのほかの松明や弓矢を持った少年や牛車、あるいは僧侶に付き添う稚児を含む。彼の作品の目を移すと、承久本『北野天神縁起』（十三世紀成立）で道真が弓を引く場面には、太刀と扇を持って座る少年がおり、その解
説に、
子供が身分の高い大人の従者をつとめている例はきわめて多く、
中には稚児である者も少なくない。多くは美
少年で一種の愛玩のためであったとも言える。《北方大神縁起》にはそうした稚児がたくさん描かれている。

その観点により源氏絵を真似ると、塗間見の場面で大人と子供は、
源氏とお供の少年と解せられる。そこで前出の
《源氏絵詞》（京都大学蔵）の一節「『人面帳』を見た絵師が、源氏を鳥雲子姿に描き、テキストにない少年を慣
習に則り付け足したと考えられる。ちなみに、この塗間見の数時間前の光を説明し、少し離れて男と少年が一人ずつ
見る」と、源氏の前に二人の男性（脅光と良清かが立って源氏が連れていたかどうかは分からないが、絵師の判断で加え
られたのでであろう。前掲の分類D（大人二人、少年一人）の少年は、源氏の手前で、家来（大人三人、少年一人）
が帰した者たちと見なすと、小柴垣の外にいるのは源氏のみで、分類A（大人一人）に当てはまることが `

さて、版画《小鏡》の拝し絵には、他にも物語に記されていない少年が散見され、ここの中で明石の巻を取り上げ
る段の中に、須原屋版《小鏡》の少年をひとり絵していて（ Miyuki 10）。ちなみに《絵入源氏》にも同じ場面があり、

絵入源氏》をはじめ『奇源氏』（おさな源氏）や明暦版・巻文版《小鏡》に、刀を肩に掛けて一人の少年がいる
（Miyuki 11）。これの少年は絵師が勝手に私付け加えたのでではなく、
堀崎本 《伊勢物語》の拝し絵を模倣したと推測さ
れる。すなわち舟の絵は第九段・隅田川、馬の絵は第八段・浅間山の図様によると思われる（Miyuki 12）。たとえば
たに改刻したもので、
天和・貞享（一六八三～一六八七）頃刊か、」と推定されている（注3の著書、上三六

注5の著書、八五三頁）。

注5の著書、五四三頁。

一九五九年に、『源氏物語』の初刊は、万治四年（一六六一）刊本より

古いと、吉田氏は判断された（同書、二一八頁）。

同様の調の日、

中には、人民がいる。

これは間違えたのではなく、一つの異なる場面を描く同図法かもしれない。たとえ

中には、人民がいる。

これは間違えたのではなく、一つの異なる場面を描く同図法かもしれない。たとえ

は、土佐光吉（生没一五三九～六三三年）が主宰した工房作とされる「屏風」で、

吉野が色紙に描いた場面を、屏風の大画面に拡大したもので、前日の船楽と翌日の仏事の光景を重ね合わせたような図様があった。
注16の著書、二三頁、それが源氏絵の伝統的手法かもしれない。
岡山美術館蔵の貝合（かいあわせ）にも、
両日の行事が一緒に描かれている（注26の著書の図裏に写真あり）。
口栞氏が作成された『源氏総絵帖別場面』によると、絵巻・色紙などで船楽の場面のみ取り上げたのは、
五件しかないのに対して、童舞のみ選んだのは十件にも及び（同氏『豪華源氏総絵』の世界、源氏物語、学習研究社、昭和六三年）。
清水周子氏の論（注13の論文）。

18
19
以上の三点は、『源氏物語の絵画』（堺市博物館、昭和六一年）所収。このほか、『伝佐佐光吉の源氏物語画』、
狩野永徳の『源氏物語絵屏風』、それに扇面などには光源氏一人しか描かれなかったり、伊井春樹氏の指摘されている（注20の著書、四七頁）。

17
20
江戸名作画帖全集第一八号（平成九年八月）に掲載。

国文学研究資料館にマイクロフィルムがあり、当館の目録には『源氏物語絵』とある。

21
22
国文学研究資料館にマイクロフィルムがあり、当館の目録には『源氏物語絵』とある。

25
伊井春樹氏『源氏編目』の補絵（講座平安文学論究、八、風間書房、平成四年）に、写真と解説がある。

26
27
『源氏物語』（日本の古典、五、世界文化社、昭和四九年）に掲載。
[Chinese text]
整版『源氏小鏡』（神戸親和女子大学附属図書館蔵 解説・翻刻）

（挿図13-1）版本『栢花物語』巻三九

（挿図14-2）『絵入源氏』宿木の巻

（挿図14-1）版本『栢花物語』巻四〇
凡例

一、翻刻は原文のままを原則とし、誤字・脱字・濁点・当字・仮名遣い等も底本の通りにしたが、読解や印刷の便宜を考慮して次の操作を行った。
(1) 底本の旧漢字・異体字・略体は、通常の字体に改めた。
(2) 句読点を付け、会話・心内語・手紙文・寄合の言葉などは「一」で括った。
(3) 明らかに誤写と思われる箇所には、右側行間に「（ママ）」と記す。
(4) 底本にある読み仮名は「一」内に、また併注や割注は「工」内に入れた。
(5) 句読は「お、きり」「おかみや」「ひかるけんし」にあつししく変えた。
(6) 底本には固有名詞・寄合・段落替えなどを示す合点記号が、それぞれ当該箇所の右肩に付いているが、翻刻では省略した。
一、桐つぼ、せんさい共いふへし
二、は、き木。井とつせみ。井夕かほ
三、若むらさき。井すゑつむ花
四、もみちの賀
五、花のえん
六、あふひ
七、さかき
八、花ちるさと
九、すま
十、あかし
十一、みをつくし。井せき尾。井よきふ
十二、あのはせ
十三、松かせ
十四、うす雲

桐「きりつぼ」つほといふ卷「まき」の事、大内「おほうち」のうち有。御殿「こてん」の名「な」なり。しれい
しやと申は、桐「きり」つほの事なり。此桐「きり」つほに、光「ひかる」けんしの御母「は」さふらはせ給ふ。

ひやらかな月をなして、きりつほの月をなして、銅「かね」の月をなして、やがて光「ひかる」けんしの御母「は」さふらはせ給ふ。
かくて秋【あき】に paranormal。かのうにつかうの母【は】も、おなしく内【うち】にさふらはさ給しそ、
若宮【わかみや】御いみのほとなれは、つれたてまつりて、さとにすみ給ふ。風のわきたちて物あはれるたれ
に、内【うち】より、かの御さとへゆけいのみやうふといふ女房【ねおうぼう】を、御つかひにつかはせ給ふ。なき
よ、あらかす。虫【むし】のねしき。す・むし。雲【くも】の上人へ大内に宮かへ人【かへ】。みやきの小
これらは、かうのさとにての事なれは、「なき人のやと」といふ事あらは、つけさせ給ふてし。な
と、よみ給ひなり。さて「さて」この御かひりかべ「かへ」りけるに、こくり物に、かうの残
たるてとみく物を取「とり」いたし、つかがりなり。あらかす。かのうの母【は】
「をり物」といふ事もあらは、「なき人」とつくはし。かのうるの、人にさぬまれてうせしおけは、その
源氏【げんし】七の御としより、御文はしめあり。かくもんし給ふに、こと。ふるのでにも、雲井【くもに
をひかす。なに事にも人には、ことなり。そのころかうしより、はかせわたたりるに、此宮【みや】をさうぜ
てまつりより、此げんしを光源氏【ひかるげんし】をといふな。そのほとのことは、
文むく人へ大きなし、むつくる。四つか、七年【のとし】へげんし、その年、七つ。
かのはかせ、あひしところ、こうゆっくりはなり。いまの四つなり。

けんしし、うるかうぶりといふこと。

けんししはつとゆひ。こきむらさまき。歯「さかつき」のついてあふひのうへより、おりを出さる、事。あ

けまさりけんししやうをはる。けんししのきみ十二にけんふく、其「その」一日、みなもとの氏「ち」を給はりて、たへなり給ひ、いはる

ひかるけんしは「これ」なり。かのけんふくの日、ひきいれの大臣「たいしん」のもとへおはします。これを、あふひの上「うへ」

けんしし、うるかうぶりといふこと。
日記に書くことは、ひょっとこ来ると心配です。

毎日掃除し、洗濯をして、晩餐の準備をする。

今日もまた、元気でない。

日記に書くことは、ひょっとこ来ると心配です。
此巻『まき』に、とうの中将『ちうしやう』の物かたりに、玉かづらの内侍『ないし』のかみの事を、『なてし
心を得へ。』とくに、このかたかへは、四月も。節分『せつぶん』ならば、かたかへといふ事、有しなり。
す。むかしの上から四季『き』に、かたかへといふ事、有しなり。
くらしのいよいよのすけは、君『きみ』のおはします御かたに。御とのるしたるに、けんしのひて、女とも
ねたる所おはして、立『たち』きふしたまへは、ねたるところ。いとかなくて、わか御へをそいひける。
まる程、しのひて、とかくの給ふに、をえ、おもひかけますもひ、
もとみしへこそ、此巻を、はいきとはいひけれ。此人はわかしななも、
すけなどかたまとなるべき人にはあらねとも、おやもなくて見あつかふ人もなければ、おもひのほかに、かくてる
たるこころをひけして、よみしなり。
さて、とかくひて、ほのかにあふ。そのままにて、しばく『立』『たち』よりたまひしかとも、つるに又もあひ
たてまつらす。いよくけんしは御心つくるにおもひ給ひけるとかや。すゑのよまても、わすれさせ給はて、いよ
空蝉 [うつせみ] は、木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木のmathrm}{

空蝉 [うつせみ] は、木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木のmathrm}{

空蝉 [うつせみ] は、木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木のmathrm}
そのひち、いのゆすゑ、あなかへ下「くた」りて、人すくなくなるおと、このこきみをたれさせ給て、一車をく
るまにせして、かのなかへはわたたりたまふ。みなは、此おさなき人はかりきたるとおもひたれは、けんしは
のししの御かたといふぞ、こちてらり。そのほとのことは、

「こき、かひまふ。ゆふやみ。道「みち」たと、しき程。一にるさ。ともしびは火ほのかなるに、うつ「く」。こき

これは、この通りのことはつくへし、しののきみ慕「こ」うちは、かそへたる心なり。

さて、慕「こ」うちは、もろともにふすを御覧「らん」して、しつまる程に、しのひいらけ給ふに、かの女は

とけてねられれば、としとくりしれて、すへりかくれぬ。これは、おなしところにねつるむすめのかくるとお

へりしたれは、これをとのこしをきてかくれぬ。せみのもぬけのことく、きめはかり残したり。心ならす、この

しめにあび給ひて、おこかましをるへけれど、あまた、ひのかたへなりも、これゆへと、人のおもはんと

むすめにあび給ひて、おこかましをるへけれど、あまた、ひのかたへなりも、これゆへと、人のおもはんと

おほして、かたれはせ給ひしかと、もとより御心さしあらされは、又ともあり給はす。その後、「のち」、「よの

9ほかにもののはのおきとむさはすは露のかることをなに」かれまし

御返しに「したおき」とよまたしに程に、この人をは、したおきとも、軒「のき」はのおきとむかへし。心ならぬ

御返し、うこご、10ほのめかす風につけてもしたおきのなかはは露にうへもれにけり

かへり給ふ。このことは、
にして帰るきぬ
此の巻の名なり。
人にしむ。

手、そのあしたの御ふみあり。さてこそ空蝉「うつせみ」とは名「な」つけぬ。これらは、みな夏「なつ」の事なり。「うつせみ」には、いか

ゆふかほは「きののなりひ
此巻「まき」夕かほといふは、六条「てう」のみやすところと聞えは、せんばうとて、とうくうにてかれ

おほけなきことい、よの人もおもひたたまつ。

わけへばゆかよび給ふ道「みち」、五条「てう」なる所に、ゆふかほのさきかこりたる、こいかあり。内に女房

ねうは、とも、あまたよしありてすめる、すきかけ見えてけり。これぞ、は「き」との巻「まき」に、とうの中

六条あたりのしのひありきに、御車「くるま」をたて、夕かほのはなのは「しろ」く映「さき」であるを、なの

の花をと尋させふに、内よりかの中将そと、是「これ」にをきて参らせと、はなを折て、白きあふきの

白「しろ」きあふき「こかしたる」といふは、かうはしめし事。
それめへ中将と、みあやまりたるこゝろ。
御返し、

15ひかりありとみし夕かほのうは露はたそかれ時のそらめなりけり

と、ひかはして、

十六日一日は、

と、いあかしの院

のあれたるに、

おきふしかたつひてくらし給ふ。

そのことは、

しのめ入いさなひしあきき。

池『いけ』。

『つるうち』とのるのすいしん、

あたえりぬれば、

ひひやりかたなり。

けんし御大刀『たち』をぬきて持『もち』給ふ。

物のあしをと、

ひしひしと

なりしより。

これらも心でて、

つけさせ給ふへし。

事かたかへになきて、

つろし。

たえいかせは、

ひひやりかたなり。

けんし御大刀『たち』をぬきて持『もち』給ふ。

物のあしをと、

ひしひしと

なりしより。

これらも心でて、

つけさせ給ふへし。

事かたかへになきて、

つろし。

たえいかせは、

ひひやりかたなり。

けんし御大刀『たち』をぬきて持『もち』給ふ。

物のあしをと、

ひしひしと

なりしより。

これらも心でて、

つけさせ給ふへし。

事かたかへになきて、

つろし。
三、若紫「わかむらさき」

この巻わむらさきといふ事、むらさきのうえのおさなりしを、よみ絵しこ歌「うた」けんし
とよみ絵しこのみを、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観、「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観、「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観、「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観、「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観、「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観、「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観、「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観、「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観、「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観、「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観、「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観、「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観、「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観、「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御観。「らん」するも、
の宮「みや」を、おさなくより心にかけ

さふらひなり。けんしも、はかくしき物におほして、めしつかひなり。
そののあねなり。このうは君『きぬ』心なやみ絵絵程に。昨いのひなたとせんて、この山にてはしましめ
るに。姫『ひめ』きみをも、つれておはしましたるを、のぞきて御覧してしませぬ絵を。そのことしは、
ことしのはか。たれれのかすみ。わらはやみもこりり。心のやみもしくるの山もいふや。かいまみ。うしろ
の山。すつめのこ。いぬき人のなや。山のはま、ちばきかりと。あつの一こ。藤さくらにつくつば。くさむしろ。やり
みつ。たのにそこまて。ほりもとるく御もてなしのさかななりや。やませとり、おとろくけんし北山にて
きんをひき絵をし。とりもおとろくとなりや。はなかきのさかなき人のてさはや。

はは、北山にての事はかりなり。此むらさきのうへは、せんてひの御この兵部卿『ひやうふきやう』のみやの御もすめ、藤『ふち』つほのきさき
には御込めなり。此北方『きたのかた』は、北山『きたやま』におはします。むらさきのうへのうはの御もすめな
おささきより御は、きにはをくれて、かのうはきみにこそ、そたたれておはしましけるなり。拝『さて』、この
姫『ひめ』きみのつくしき御かたちをのぞみて、いかにしてか、これを取『とり』たてまつりて、かのうはもに
かしつたて、かの御かたみに見たてまつなおほしめして、かのうはつとにひとたてまつり絵を、うは君
『きぬ』とも、いひよりなとして、つるに、その年の九月の頃『ころ、うは君にをくれて、京『きやう』の殿『と
きみ』にかすかなるすまるにておはしまますを、とりたてまつらせ絵を、二条『てう』のあちにのしのたたいにわた
たてまつり、もてなしき絵をふ。姫『ひめ』きみ、十の御としむなり。かのねはきみに、北山へおはしませ
しろは、三月廿日なり。さかぞこ、京『きやう』の花はさかりすきて、山のさくらはまたさかり、とはいひたれ。

又、北『きた』山に、『すくん』といふこと、つくること。これば、むらさきのうへ、すくぬの子『こ』をかひ
絵を、いぬきとひいしこのは、にかしたりを、むらさきの上、いたくお休みて、なさき絵を御すかたの、い
こうむらさきのならひ
末摘花「すゐつむはな」

又、むらさきの上、二条「でう」のあるへ、むかへたまびし阿染、日いろのきぬを、きたまへりといふ事のあしたはかり、日いろのきぬを、させたてまつりげへは、いまた御はの御ふく、の中れども、わさと其「その」あしたはかり、日いろのきぬを、させたてまつりげるかとおほゆ、これを、ひしんとといふなり。かくして御心さし、なかへたたなくて、けんし五十三、むらさきのうへ四十五にて、かくれ給ふ。源氏、雲「くも」かくれ給ひしも、このもののきゅへなり。
此巻さすつむ花といふ事。ひたちの君「きみ」と申ふるき宮「みや」おはしまし。うせ給ひし御あたに、姫君「つみき」、人のこりておはし。いとかさなる御謡を申して、寻「たつね」たてまつり給ひける。けんしの御めのと少将のみやう足て、内もひのほかに、おかしけにおはしり。この御かた、色「いろ」しろく、はなた、くやしくおほしきれと、此御すかたをは、我ならては、たれか見たくのかずにれて、二条「とう」のあん、ひかしのたいないすまし聞え給ふ。けんし、17なっかし色ともなしになじに、このすゑつむはなをせてもふれく。

此君「きみ」を、心にく、おもひて、あふびの上のあのにのうの中将「ちうしゃう」も心かけて、源氏のおはしますを見あらばさんさて、あとにつきてゆきて、つるに見あらはして、そのかたに源氏「けんし」の御そてをひかへて、とうの中将「ちうしゃう」には、まことなし。すゑつむりは見をとりして、くやしやうつむへ。
四、

紅葉賀『もみちのか』

此卷『まき』、もみちのかといふこと。桐『きり』、つぼの御門『みかと』、そのころのもみの御かをつとめ絵ふに、

ころは十月なり、紅葉『もみち』をたなびきて御かあり。さて、もみちのかといふ。もみちのしたにて、れいしんあり。てんしゃや人、宮たちも、そのきやうたるは、まひ給ふ。そのすかた、けんしのせいかいはをまひ給ふ。

ふに、ししくはなし。うつつしき事、たとへんかたなし。かたてには、御こしゅうと、とうの中将まひ給ふ。けんしに、

まかしかへ給ふ。ゆふはへ。あしふみ。かほのにほび。木『こ』、たかぎもみ。

楽『かく』は、せいかいはなり。あとみのなみと、かげり。

で立『たち』みにつけてといふ歌『うた』あれば、これらを引『ひき』あらせ、つけ給ふへし。その夜、藤つ

ほの宮『みや』へ、けんしより、我『わか』まひのすかたをも御覧『らん』しこらんとおほして、しのひて御ふみ

とあやへす。かくまつり給ふ。御返事に、

19物もふにたちまぶへくもあらぬ身の袖『そで』うちふしぃし、ろしぃきや。

20から人の袖ふることとはとけあたらちるにつけてあればもみき

とありしなり。『から人の袖ふること』は、たう、おうきひのけしきやううのはしあをみへ、よそへけるにや。

指、此卷『まき』に、藤『ふち』つほの御はらに御子『こ』うまれ給ふ。これは、まことは、けんしの御子『こ』
六、葵『あふひ』

此巻『まき』、あふひといふ事。一の巻『まき』に、けんじしつて元服『げんふく』のその後より、やかて、
ひき人の大臣『しん』の呉に立てておはします。北『きた』のをは、あふひの上といふ。此巻『まき』に、
源氏の御方に奈雀院『しゅしゃくるん』の一師はらの姫宮『ひめや』、かもののいつきに、とつなり給ふ。御女と
源氏は、その頃『こころ』大将『たいしゅう』にて、つかつまつり給ふ。そのときには、いみし御ことにて、人々
に源氏は、その頃『こころ』大将『たいしゅう』にて、つかつまつり給ふ。そのときには、いみし御ことにて、人々
は九の巻『まき』に、けんじをすまずなかす。拝『さへ』こそ人の『きみ』も、つるに女御『ねこ』とたに
いはす、ないしのかみにておはしませ。
巻「まき」に八月に、あぶび上をとりころす。此みやす所へ、けんししのひまわりし給ふこと。 御門「みかと」、

あらそひののくま。なたる。おはの。かすなりぬ。

しのひまわりし給ふこと。 御門「みかと」、

うるましひまわりし給ふこと。 御門「みかと」、

はれぬ。かすなりぬ。

へにしたかへて、つくへし。

とめる。此返事、むらさき、

とよみ給ふ。此返事、むらさき、

24千ひろともいかためかしらんさためなくみちるしののとけからぬに、

てちぎりの木れくに、「かみそき」といいふことあり。 伊勢「いせ」

とよみ給ふ。
ならきて、十月の事なれば時雨「しずく」ふりあって、いまさら御なみたをもよぼす。おほい殿をはしめ立てまつりて、日ころ宮「みや」つかへなれしこ女房「ねうはう」なた、心おさめやらる、袖をしもぼる。源氏「けんし」の君「きみ」も、たちさりかたく、御なこりかたしよおはしめしなから、なくかへらり給ひて、むらさきの上の御かへたかり給ふ。

しかりの程に、いみしくかかりに、ねどるのひて、うつくしく見させてかたし、此むらさきの上、十のとしより、もてさたて給ひしかとも、いまたおさなくおはしませ上、此の姫君「ひめきみ」も、けんしのわか物おぼしつるとは、ゆめくおほしみよらて、すかるほどに、その御とは、ある夜、むらさきの上に新枕「にらまるら」ありて、つきの夜、けんしの御心しりのこれみつを淺めて、の給ふりありて、おはしめりよ。あすの夜、かやのおり、かすくにありて、しためて参らせるとおほしつく、これみつけ給はりて、「ねえ、心えで立「たち」ぬ。君「きみ」も、もののれのものやと、これみつを心まきしておぼしつる。心は、むらさき「まくら」日つひ、つきの日、つひの日、あぬの日、としたかたり、けんし、三かにておらさかし」との給はれ、御ひは有へきに、あぶひの上かくれ給ひて、帰「かへ」り給ひたる折しれは、三の日は、あぶひのあつまは給ひて、あぶひの和しきれは、けんしはかたり、三かにてやかに、れなかし」との給へり。おもしろかしは、むらさきのうらしき。
それはおとなしくて、はつきしくおぼしめすへいとおもひて、むすめの弁の君きみて、といふをよびて参らせたり。つきのあした、とりいたす折におりふし、御めのとことしりて、御心さしの色をあはれにも、めでたくも。

七重『さかき』

此巻さかきといふ事は、歌に六条『とう』の宮『みや』を所、

下くたりふぶなこりも、おおくおぼしれて、ところは九月七日八日の月夜『ゆふつくよ』にてはなやかにさし出て、

ゆろつ物あはれにて、おほしみして出て、あしろのくるまのひやかなるに、うちにかられるとさまざ、かの野口中の宮へ、けんし参り給ひて、御覧しければ、

かみひて、あさちか原『ばら』もかくれに、吹か吹きしぼれると松『まつ』風に、身にしみても、むしのこりも。

あかひたるもののをと、たえかどれくに、ひたきてはかりかさかにて、人さまるけしさきもせます。こうに、

のものはしき人のすみて、さそおむひのこす事なく、おはすらんと、よそまで思いやりしより、あはれにて、こ

の程のとたえを、われなから、うらめしくおぼしれて、御まへの楠『さかき』を、いささかおらせ給ひて、みすのう

三か一。みかのよのもちる。ねのこ。にあらうる。
し、きれいに、かたまりなとし給ふおりの歌「うた」。そし。そのぬに、さかきの巻といふ。

「丸く」の物かたり、あかつき近「ちか」くなりしほは、かへり給ふ。其言葉「ことは」は、

波「なみ」。あさちかはら。あかつきのわかれ。やそせのなみ。いせまで。すくか川。八寸瀬「やそせ」の

十一月にかくれさせ給ふ。其頓「そのこころ」より源氏「けんじ」は、事にふれて物くらしめして、常「つね」

にやか殿「御かた」の内にて、むつましく成ゆきて、内侍のかみのことを、此巻にあらはれて、終「つね」に

深く、「なかされ給ふ。此事、此巻「まき」に御門「みかた」に開御「はらきよ」なりげるやさら「やさら」なり、

人のはつねに、しらさがらは、

むけなれは、書「かき」なり。
五月雨「さみたれ」の空「そら」に、かたふくられる。たちはな。やとのかきね。
これらはみなく、さみたれのこころなれは、「ほどいる」にも「たちはな」にもつくへし。

九、須磨「すま」

これはけんしの御あに朱雀院「しゆしやくのん」、御くらるるの時、はなのがえにあひそめ、おほろ月の内侍
「ないし」のかみのこと、御門「みかと」の中、さし時かせのがえ、ながめをかじし給ふと聞えて、
うちの御は、大に御腹「はら」にかじし給ひて、あしきさまにいひ、すまへなかし給ふにより、すまとはいふなり。

頃「ころ」は三月廿余日なり。そのことは、
かたのみのかみ。おもやせたる。はしらかくれの面影「おもかけ」。さらぬか「かみ」。あかつきかけて出る月。
これらは、須磨「すま」へおもむき給ふ折なり。むらさきの上の御名残「なごり」おしみ給ひしおりのことはなり。
まことにこのなみどり、さかさまはしけめ、おさなくよりおほしたて、父「ちち」はひになりてもなし、そこは
の月をかきるへき御かれたるは、せんかたなくおほししながら、しっかりと、しきもし給ふに、御鏡台「きやうたい」によりる
てびんかき給ふとて、此ころのおもひにおもやせ給へ、われなから、なのがえに、なのがえに、なのがえに、なのがえに。

27身はかくかきすらへぬと君かあたりさらぬか「かみのかけははなれし
とよみ給ひし返事、むらさきの上、
28わかれてもかけたにとまる物ならはか「かみをみてもなくさめてみし
よくはし給ひしことはなり。「かたゐのかみ」すまのわかれなどに附「つければ」させ給ふへし。

頸磨すまの巻「まき」に、「はかまいり」といふ事を、人専「たつぬ」の事あるは、あらかふへからす。な

中納言「ちうなこん」の此うらになかられて、「ましはたれつ」とよみけんとる、近ちかき程なれば、

庭は「は」の草「くさ」、たてし、さくらなど、にらうへて、時のほど、みところありて、しなさせ給ふ。その

又、すまに、「しは」といふことは、おはしますうしろの山に、たつけぶりを、なにそとたつね給へ、しはと

庭は「は」の草「くさ」、たてし、さくらなど、にらうへて、時のほど、みところありて、しなさせ給ふ。その

庭は「は」の草「くさ」、たてし、さくらなど、にらうへて、時のほど、みところありて、しなさせ給ふ。その

とよませ給ふ。「もしはやく、けふりにまかす」なと、つければ給ふへし。

29山つつのいひにたけるしはくもことひこなるとふさと

やうく、なか雨「あめ」のころになる。これも、すまになか雨「あめ」といふことはなり。心うへし。かや

うにとりしつめ、京「きょう」へ御かびをしたてのはせ給ふ。ところくの返事に見給ふも、いかはかり

は御なみた。もよはし給ふ。これらは、ことはにつくしかたし。
らんかたなし。露「つゆ」ならば、たれにつれぬひとりねの、よもあらしをきししに、波「なみ」こゝもと
に立「たち」くるゝ。行平「ゆきひら」の中納言「ちうなこん」の、「せきふきにゆるる」とよみけんも、お
ほしめしはせて、なみておつとはおほねとも、枕「まくら」うくばかり也。宮古「みやこ」より待「もち」給
ひしげんをひきよせて、御心のまゝにひきすませ給ふ。われなから、そこおもしろくおほし、そのほとのこと
は、
ともちとゝり。月のかほ。ねさめのところ。よものがありし、うらなみ。たちくるなみ。なみたにうく枕。
これらはみな、すまのうきすまるのしきなり。いかに、すまには、都をこひしのふふせひ、「うきな、たちし

31 うきめかしろすのあまをおもひやれもしぼるてづまのうらにて

30 いせしまやしほひのかたにあさりてもいふかひなきはわか身なりけり

29 きかぬたる文」入宮をす、すまへ文。歌にて見えたりでべん。いせし。おもひやれは五枚にかふえ。みちのく

28 かみひ。しょうひのかた。ゆふかひなきわか身。うきめかし。いせのあま。

27 これは、宮をの文ありし歌「うた」のことはなり。

26 かくて、その年もくめぬ。つまのとしに春「はる」のころ。かくせしほひあふひの上のあなの、あふのふふれ「ここ」かなしまして、かふるまのそしりをもし

25 ゆしやうの、けんし。すまへうつしほしほしよりは。あふのふふれ「ここ」かなしまして、かふるまのそしりをもし
歌うた
ようみ寄ふ。夜明けぬれは、なくかへり給ふ。けんし、つなかしくめつらかにて、御かたみと
おなしなみた。雲のにひとり。くるごまふる。なみた、そゝく。はなのさつき。
これらは、とうの中将『うししょう』のおはしたるときの事なり。なつかしくあかぬ名残『なこり』めつらき
かくて其年、三月一日、「その日の御はらへし給はんとて、けんし海うゐつらへ出たまふ。にはかに雨風
ひらめきわたる、をそろしき事かきなし。日数「かす」をへてふれは、みやこよりしよくの御つかへも参「ま
ひれ」りけり。おなせはお知て、くたる「かへせ」なうふ事、有し。此つかひ、あかしの巻「まき」に見えたり。

うた
も、のみちしにあり。もうちししの事、なかくししくてかふ。つるたちより十三日までは雨、をや
みなくふれ、三月のあかつき、おはしますさらうに、かみなりおちかいる。あさましなといふは、かきりなし
その時、すみやしの神「かみ」を深くきねしして、御心のうちにくらんともありしからん。雨風「あめかせ」しっ
まりて、空「そら」もみどりの色「いろ」になりしかは、すこしまとろみ給ふたるに、御夢「ゆめ」のつけあり。
ち、こる。「ゆめ」をむくへし。
此巻「まき」に源氏「けんし」・須磨「すま」よりあかしのうらへうらたした給へば、あかしの巻「まき」と
いふへ。かの十三日のあかしき、おきのかたへむかひ、夢「ゆめ」さへて御覧せられたれば、ちいさき舟「ふね」
にのりて、はりまのさきのこくしもほひ、これをあかしの人道に「うたう」かつ少なから。かの人のもとより案内
「あんない」申へ、けんしをよひたてまつりて、御むかひに舟「ふね」をたたてまつる。此君「きみ」ゆめうつ、お
ほしめしあはせて、さうなく、このうらへうつろに給ふ。入道に「うたう」よりこひ、かしこまりて、かきりなく、
かくて都「みやこ」の御すまらにも、ことならす、まはゆきちちはさぎりて、かゝやくほどとなり。せんすい、た
に、いけのや水「みつ」、めもとよくはかりなり。ふる里「さと」の池水「いけみつ」、おもかけ見ゆ
「り」なといふことばはあり。事よりて、つくへし。これは三月なり。程なく四月になれば、ころもかへへの御しやうそく、御丁のかたひら、かへしよまでありたてて、まはゆきほと、
にてなさしつくってまつる。此入道に「うたう」、いみしくかしつくむすめ一人ちたり。これぞ、わかむらさ
きの巻「まき」に、ワラはやみのおり、北「きた」山にて人々かたりいたし候むすめなる。「つねに「おもひこ」
「ひとこ」なぞとづくは此事なり。心させせ給ふへし。なへてならす、おもひかしつきて、なへてならんもこ
をは、とらしとおもぶに、かのひかるけんし、すまにしつみ給ふを聞へて、いかににしてかは、こへとへうつし参ら
せて、むこにとりたてまつらんとおもふ心を、すみよしの神のはれとおもひ給ひけん。とし月すみよしに祈
いのり聞えり。すまにて、けんしの御覧しけんゆめとおなしまように、かの人道に「うたう」、も夢「ゆめ」を見
ある夜、けんし都「みやこ」の事、二条院「とうぐう」との来訪者の上の世よりはしめ、かすくおほしめし出で、物あらざれは、琴「きん」をひきつるの入道・にうたう、たへかねて、ひらかしやうのことを持「もち」て参りて、すくたてまつるに、すこしほきさきひつげつて、にえはやうはなくひきければ、此ひは、ことを、ひかせてまつらはやと、申いたしたりしより、けんしもゆかしくおほしして、「つふ文なとかよる。そのことは、くぬしる。うすくみ、かすめやと、ちこじ、をかへのやと。

「あかし」といふことにつくし、このをかへのやく、入道「にうたう」のむすめ、すまきして、ひろしきおほしめして、けんしし33秋「あき」のよつぎのこまよかふる雲井「くもむ」をかければ、かよはせつぶふに、「ある夜」「よ」都「みやこ」にこ

「あかし」のかびくまつりて、持「もち」たるとあり。このむすめ、六月のこより、たくならすなりりしを御覧しだれて、八月に都「みやこ」へもしかへさけ給ふ。此うらにな、三月より次「つぎ」の年の八月まで、おはしめす。すま、あかしのうらに、「ことせ

（図説）
此巻「まき」を、みをつくしとふる事は、37かすらってなはてもかひなきになにみをつくるともひそめん

「ほか」の権「こん」の堆言「なごん」になり、内大臣「ないたいしん」かけ給ふ。いみしくさかへ給ふ第「ほと

秋「あき」のころ、すみよし「よし」へ参り給ふ折ふ、かのあかしの御かたも、はる秋「あき」こと、おさなく

にて参給ふを、しらすして、あかしよりまよりたれは、松原「まつはら」のあたりに、御車「くろま」てつ

けて、いみしきさまなれは、たれか参り給ふぞと、なおはに御舟「ふね」さしとめ、やすらひ、とはせ給へは、

とちかく参りて、かくと申けるは、下のひかに、人しらせければ、れいの御心しりのこれみつ、御車「くろま」

をてつ出して、御車「くろま」の内「うち」へたてまる。たうかみに、けんし

とよみて、かの御舟「ふね」につかはす。されば、「みをつくる」といふ事は、

すみよし。めくらあぶ。なにはの舟「ふね」。
さて此卷に。あのう。へは姫君、三月十六日にうみたてまつり給へば、京「さきや」より御めのとくたさるや。此卷「まき」「せきや」といふ事。みをつくしのならひ、

関屋「せきや」みをつくしのならひ、此卷「まき」「せきや」といふ事。けんし石山「いしやま」へ参り給ふに、せき山にて。あひ給ひしかは、人しれす、むかしの事をおほしめし出て、石山「いしやま」へ参り給ふ。むかへに、こきみ参れり。此の中へ、むかしの御心じりのこきみをみて、御文あり、其心は、

にんげん。「さきや」といふ事。みをつくしいなはり、

蓬生「よもぎふ」みをつくしいなはり、

みをつくしのならひ、
あかき女房（ねうううう）、ためしにかきしば、ひとたのやの宮の御ゐぬよ、かし。

けんしあへれみて、しばしらばせ

あかき女房（ねうううう）、ためしにかきしば、ひとたのやの宮の御ゐぬよ。

けんしあへれみて、しばしらばせ
十二 結合 "さあはせ"

此巻 "まき"、さあはせといふ事。そのころのみかとは、けんし藤并の宮の御方はにし、しのひいてき給ひし

宮にておはします。後には冷泉 "れいせん"院と申。此宮、人めには桐 "きり" つぼのみかとの十にあたり給ぶ宮
にて、ことのほかに御いをしみにておはしませ。かは、御くらるにつかせ給ふ。かの朱雀院 "しゅゆしゃくぬ

には、おとなしき宮もおはしませ。みをつくしの二月に、とううくに立給ふ。さくらの花をちりほほ

おはしましょうる。

此御門のみよには、源氏近つれてはからひ奉り給ふ。むかしのあふひの上の御ち、左大臣 "さたいしん"殿、せ

さゆうをもたせたまふ。なに事も御心のままにて、めてたし。御孫 "まこ" の姫君 "ひめきひ"、こくきにてに

しほぼ給ふ。左大臣殿 "さたいしん" の御まことまり。とちのあととのむしめなり。みをつくしの八月に、お

さくらの花をちりほほ給ふ。左大臣殿 "さたいしん" の御まことなり。とちのあととのむしめなり。みをつくしの八月に、お

さくらの花をちりほほ給ふ。左大臣殿 "さたいしん" の御まことなり。とちのあととのむしめなり。みをつくしの八月に、お

さくらの花をちりほほ給ふ。左大臣殿 "さたいしん" の御まことなり。とちのあととのむしめなり。みをつくしの八月に、お
此日、あかしの二の名は、すまたにおはなし時、たへなき御所近くのあまりに、色々のかみに、うらの
けしき、山のたたねを巡る、御心のゆくく、かきすまし給ふ。それに、わか御有さまをかき給へ、いかてか、を
らはな。たへんかたなし。これを心えて、付きさえ給へ。此御系をは、わか物なから、あまりにひして、都へ
きの上の三のうらみといふ事の一に、此ことはありと心えへし。には、あかしは、を参らせられし事。以上、三なり。

十三、松風「まつかせ」

此卷「まき」、まつかせといふ事。けんしの、あかしに御心させ浅「あさ」からす、入道「うとう」のむす
のうらより京へ、のほり給へ、のほり給へ。あまりに、かひへたへりたれは、おほかなく恋「こい」、しぐおほして、「か
はき、人道「うとう」の北かたの、おほかはのたれに、大さらのすまる。先しはは、つつかしとて、かのあかしの文の上つ、みを見
せはぬ事。一には、きぬくはりに、あかしの上に、しろきぬを参らせられし事。以上、三なり。

さて、おぼ井にゆきつきたれは、そのあたりなれば、川「かは」なみすく、松風「まつかせ」ふきはりひ、
ふるさとしあおめす、さびしければ、あかしをけんし、出給ひしおり、都『みやこ』よりたま給ひしことを、あふまでのかたみにて、まき給ふを取『よみ』いたして、ひき給ふ。

43身をかへてひとりかへれる古さとにきしにたる松かせふく

と、よみしゆへなり。そのことは、

都『みやこ』にかへる。かたみのこと。まつ風。おほ井川。

なといふ事を、つくへし。

撮その頃『ころ』、源氏『げんし』、かつらに御堂『みたう』をいかめしくたて、月に二度『と』、念仏『ねん

ふつ』なとのために、おはしけるるるにて、大井へも。わたら給へは、月に二度『と』の御契『ちき』りー

とふ。あかしの上、おほ井に住『すみ』なり。かつらのつるてに、源氏のわたら給ふを、みな人、かつら

にすむと心えたり。能『よく』々。心え分『おわ』て付給へ。月に二度『たひ』の契『ちき』りーは、『大井』

『かつら』に付『つく』へし。姫君『ひめぎみ』、三にて登『のほり』給へは、『ひるこのとし』と『まっけ』『大

井』に付へし。

又、此巻『まき』に、『おたくさり』といふ事あり。これは秋『あき』のころ、けんし、かつらへまとうて給ひて、

れいのことく、おほけにおはしける時、わたき殿上『てんしゃう』人。君『さと』たち。あまた、小たかかりのつ

れてに参りたれは、『まきな』とまいか。月おもしろきあたりなりけは、あそび給ふ。小たかかりのつ

もを、わたきの枝『えた』につけたりとあるを。まるはしけをさすり心得へからす。ちいさき木のえたく心えへし。
この巻「きこ」に、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にあり、さかからとししく、月日のけしき、雲「うきも」のたすまるまで、ふしぎなる事と
にある。
おりに限りは、御おはおも、その、
あさかほ。も、その。

など、いふ事に、つけへし、御心つよきて、のちに、つらに、御くしをらし給ふ。心つよきて、やさしさきをつくてへし。

源氏目录

巻中

十六、乙女「をとめ」

十七、玉鬘「たまかつら」
十六、乙女『五とり』

此巻『まき』、乙女『五とり』といえば日記の賀茂『かも』の臨時『りんじ』のまつりといふ事を、大内『おほうち』にてとめさせ給ふ。時分『じぶん』は十一月なり。二十『はたち』よりうちの女房『ねろう』をそろへて、天人『てんにん』のすかたにいたしたて、舞姫『まひひめ』とて大内殿へ下り人などのかたより参らせらる。けん

しつとめ給ふとき、御中のもみたくかすめを出し立『たて』て参らせ給ふに、しきのひてのそきて御覧『らん』

の袖『そて』につけん

とよみ給ひしゆに、乙女『五とり』といふなり。返事、

47をとめこそ神『かみ』さびねらしアマヲ袖ふるきよりのもとよは呪へぬれは

48かけていへはけふのこと、おもはゆる日かけの霜『しも』の袖『そて』につけん

むちみちとせぬのは、乙女『おほうち』に、とうの内侍『なにし』のすけとて、さぶらはせら

うと聞『きこ』えさ給ふか、此巻『まき』より、ときくくを見られたまふ。あまの御子『こ』、のちには夕取りの大しゃ

を付『つとけ』へし。此ことは、乙女『五とり』、神の神楽『かくら』の義『き』、なれは、いかにも神祇『しんき』

又、此巻『まき』にタ『ゆふ』きのの大しやう、十二にて元服『けんぶく』のところより、おちは内大臣『な

いたいしん』の御むすめ十四はかに成給しし。うはの大宮『みや』のもとにおひたち給ふを、おささぎ御心にふ
かく心にかけて、こひしのひつじ、ひめ君「きみ」、しつ心なきもろこひなり。御父「ち」さく、つけ給ひて、あ

やなくひきのけて、姫君「ひめきみ」をは、わかもとへしのひやかに modificar とぞりょ給ふ。此姫君「ひめきみ」、御心く

るしくおはして、ある夜「よ」のねさにふ、「雲井「くもる」のかりの我ことや」と、しつひやかになかめを、

かの夕から「たち」きいて、いとおもしのまざりしなり。つるに藤「ふじ」のうらの巻「まき」に、おとっ

雲井「くもる」のかり。ねさめ。もろこひ。

ニ、やくす」の御心つしく、いとこひ、なにぶ事を、つくへし。

おかのき程「ほん」の御心つしく、「いとこひ」といぶ事の侍りし、なに事こそ、おもふかくさ。此人々、ある時、

ユふ」のきの其頃「そのこも」は、いまた六位「む」にておはしがる程「ほん」に、此姫君「ひめきみ」をは、

いかなる隙「ひま」にか、一ところにて物かきしご給ふ、此雲井の雁「かり」のめのと腹「はら」たちて、タ

がす」をつくに植「う」るる。さきてを春「はる」の御かた共、申しける。東「ひかし」の町「まち」には、

まつ南のひかしには、むらさきの上の御かた、春「はる」のあけぼのをしき給ふ。春「はる」のあけぼのをしき給ふ。

又此巻に、けんしのとおし、六条京極「つうきょうごけ」あたりに四町「まち」をしめて、殿「の」つくりし

はらたちさしたる「ゆふ」きりに付「つけ」んも、つ

花ちる里「さと」と聞えば、夏の御かたにて、うの花「さうひ」、くたに、ふち、つりしなど植「う」たまひた
り。是は南おもてなり。花ちる里「さと」にて、おもしろく、梅「むめ」つぼの女御「ねうこ」申、六条「つ」の宮。「おろめ」の野「の」、からにうつし植「うえ」で、木「こ」たかき紅葉「もみち」の色をましへ、におはしまし。「うゆ」のけしきをうつして、冬枯「ふゆかす」の野「の」、秋「あき」の枝「え」をみみて、をくられたり。御返りは、此はこのふたに、こけしき、いばなと心はへして、五葉「とう」の枝「え」をと

去程「さるほど」に、かたくとのつりてたかして、秋「あき」このむ女御「ねうこ」の御かた。そのころ、おりにあひたれは、ことにおもしろきふに、かの女御「ねうこ」の御かたより紅葉「もみち」を箱「はこ」のふたに
とみて、をくられたり。御返りは、此はこのふたに、こけしき、いばなと心はへして、五葉「とう」の枝「え」をと

歌「うた」有り。
御返事に、これもはなをいはねの松「まつ」などに取して、去年「この」のことく、おらはして御つかひ有り。

十七 玉鬘「たまつら」
玉「たま」かたるといふ事。敏末「はゝき」の巻に物語と、なてしこの事あり。むらさきの上に御かたに、玉かうらの姬君「ひめきみ」の、つうしよりのほり絵しを、右近「うこん」はせにて参りありへ、源氏けんしののおとに申たりしかは、むかへとりてもなしへつかせ絵しべ、むらさきの上、「いかなるす」とよく絵し故「ゆ」なり。

「こにて此玉「たま」かたるといふは、夕「ゆふ」かほの上に、はかなくをくれ絵しべこと、年「とし」は

おとなひ絵しべまゝに、御かたちもかたしけなく、うつくしくおひたち絵しべ程「ほと」に、めのと、あは

此花みち、殿「とる」うつりの庭「にれ」のけきなとは、四季「な」の心にてあらめつらんとおへ候。
れに、いたはしく、もてないしかつきたてまつり、かひなく、めのとおとこ小賀「させに」命「いのち」つき
ぬ。いふかひなくかなしきて、めのと、はこくみたてまつる程に、ならひの国「うに」のしゆこといひよりて、す
てに日としても人させるとす。是にこち給ひて、かなしみ給ふ程に、めのと二人して、とくかかまへて、京
「きょう」へのはこすてまつる。御とこ三十三。これを、「つくしのほり」といふ。かの大名を高く、かを
ての舟をやたてんすらんと、おたで、はや舟「ふね」にて上「のほ」せたてまつるなり。これを、「つくし上りの
廿年。はやふね。
つくしのほり」なといふ事付へし。
「つくしのほり」なといふ事付へし。

かくてのほり、はせにて右近「うこごん」参りあひ、けんしのおといに申て、むかへ侍りて、をきたてまつりて、
ひしろの大将「しやん」の北「きた」の方「かた」になり、うちの内侍「ないし」のかみ、かげ給へは、玉かっ
らの内侍「ないし」のかみとはかけるなり。此人、はせへ参り給ふ事は、京「きょう」へ上りて、しるかたな
父「ち」、おとこにいまま申さす。又、源氏「けんし」のとと、も知「しり」給はす。水鳥「みつとり」のなか
あり、巢「す」をほこるへたのみ給ひて、また、はせへかちにて参り、ほどにうけたるに、「はせせ参り、
さらは、「つくしのほり」に「はせせ参り、苦しからす付「つけ」へし。此姫君「ひめきみ」のおさなき名「な」
は、るりきみといふ。
此歌、本歌『ほんか』に

初説『はつね』玉かつらのならひ

此巻『まき』はつねといふ事は、明石『あかし』の上の歌に、姫君『ひめきみ』を、むらさきの上の御ことになし、ておはしませば、見てもまつる事をなくして、恋『こひし』しくおもふに、正月一日、かの御かたへ文参らせ給ひ。
此巻 『まき』は 素顔 なること

玉か九歌に、

此心は玉 『たま』 かつらの君 『きみ』 をむかへとりたてまつり、かしつき給付程 『ほど』 に、心とけ給ふきょう

ち いとおはき中に、源氏 『けんし』 のおとを、兵部卿 『ひょうふきょう』 のみや、此君 『きみ』 を限 『かぎり』 なく御心にかけ給ひて、五月四日の夜、しのひておはしたるに、けんしすきく 『しにく』、かの姬君 『ひめきみ』 の御

かたちのすくれておはしますを宮 『みや』 に見せたてまつり、いくつ 御心をつくさせ申さんとや。其のそたに

ゆふ つたか、ほたるをおほお取 『とり』 ついて、きちやうのかじんかにつけ、光 『ひかり』 をさと見せ

て ほのかに見せしより、

かのかつらのしつんにうに、こそこ をかけじ女 『をんな』 こそ、月のひかりをまちかねて、ほたるを袖 『そで』 に

つめぐるなと いふ、ふかきめしにあそへたり、かのかつらの親王 『しんうう』 と聞 『きこ』 えし人は、清和

天皇 『させわたんうう』 の第 『だい』 五の御子、ひわの上手 『しゃうす』 そかし。これもり

五とかげり。ひわひきとあり。おもしろし。これは、

ちやうのすきかけの蛻 『ほたる』。あやめのしつく、ほたるのかけ、ほのかに見し。
なと云「いふ」事付「つけ」へし。五月四日の事也。

双夏「ときなつ」
玉かつらのならひ
此卷「まき」、とこ夏「なつ」、と云「いふ」事。玉かつらの君「きみ」のすさま給御かたをは、西「にし」のた
こなとも、とおのへ植「うへ」わたされたり。此御かたの庭「は」には、なできの色を調「とどめ」たる。かかるのも、又やまとせてし
てしちとも、たり出し「ゆへ」にや、おもしろし。咲「さき」をもたれて、えならすおもしろし。かのあまよのものかたりに、ちどおとし、此姫君「ひめきみ」をな
かれ河よりたてまつりたるを、御前「まへ」にて、てしょう参らせ給ふ。此心も、近「ちか」事、かは「か」、
にし「は」なたつなり。いかにも、すすしき所を付へし。そのゆへ、なでしこ
とふ。
琴ことをまくら。ゆぶやみ。こひのけふり。おきの初風はつかせ。手枕たまくら。おもひかくる。野のわき玉さらのならひ此巻「まき」野分「のわき」と云「いふ」事あるべし。

なとろに云「いふ」事あるべし。かから重り、瓦もかさら重り、すさましく、おぞろしかりしも、松「すなわち、風「かさ」ふく物也。源氏「けんしのことをなたらと、秋「あきの風「かさ」と云「いふ」なり。

さて、源氏「けんしの御子「しのぶ」よりの大将「しゃうの、いたち中将「ちうしゃう」にておは野分「のわき」と云「いふ」事あるは、此歌のことはをも、取ぞふへし。「かるかや」「むらさきのうすやう」「こひしすり」なといふ事あるべし。
此巻「まき」、ふちはかまとのふ事。夕霧「ゆふき」の大将「しよう」の御歌「うた」に、玉かつらの内侍「ふち」の内侍「はいし」のかみに参り給ふへ、

「ひめきみ」の内侍「はいし」のかみに参り給ふへ、

「ひめきみ」の内侍「はいし」のかみに参り給ふへ、

「ひめきみ」の内侍「はいし」のかみに参り給ふへ、
かひのさきにて、をし入たまふなり。

65いまはててやとたれぬと思まれきるまきのはしらよわれをわするな
と、よみ給ひしなり。かき給ひし紙「かみ」「まきはしら」なと、つくへし。

「ひばた色のかみ」「まきはしら」なと、つくへし。

「はるかはひ」といふ事。此巻「まき」の名句「めいく」なり。玉かすらへ此ひけくも、かよびしに、もとの
北のかたは、けんしのなと、なへてならずおもひたまつり給ふむらさきの上に、別ふ「へちろ」と
式部卿「しきふきやう」の宮「みや」の大ひめ君にて、世のおほかおもりかに、あらたに
「つね」は御心うつ。なへてるしるる程に、なにとなく、さやの御かたより、御中も、あかれるやうなりに、此
玉かすらにかよびぞめては、叉おこの御心いかながら、うつひはて、やすき御心もなし。北「かた」のかた、
といのやかにて、わか御身のほと、心はててさけ給ひて、諸共「もろも」に出「いだ」したてなして、や
り給ひか、れいの物のけのわさに、大きなるひとりに、ひをとくに、はいもち、御ぞもやけこかれなとせしあり。それよ
さらゆのて、おき出て、ひとりをなけさけ給つぐに、はいもち、つるにかくも、はなれ給ふ。此ことは、
火「ひ」とりのはい。物のけ。うとむ。

又、此大将「しやう」をひけくらといふは、異名「いみやう」なり。御ひけのくろおくはしままて、見さか、け
なといぶ事付「つく」へし。頭は冬「ふゆ」なり。
十八 松枝「むめ」かえと云「いぶし」事。正月晦日「こもろ」のころ、源氏「けんし」のおとの六合の院「ろん」にて、たき物あはせありし。これはあかしの腹「はら」の御むすめ、とうとうに参り給ふ御意をき
なり。香「かう」をもて御方々へはけて、いとゐはせ給ふ。（御衛院）
源氏「けんし」に心よくてやみ給ひし人なり。此御かたより、ちりすきたる梅「むめ」かえに、ふめつけて、こ
もあるひにたき物て、五葉「えう」のえをたに付「つけ」自「しきる」きつひにたきものいれて、梅「むめ」
をおりて、むすび付たるいとのさま、なよひかにえらす、おもしろくしなされたるに、その歌、「なよひかなるい」と「るりのつぼ」などあるし。
やかた其夜、かのはたる兵部卿「ひやうふきやう」の宮「みや」に「い」と、くるしきはむさしありて侍「はんへ」
るかな。いと、けふたしや」と、なやみ給ふ。おなしはうかこそ、いつくにもちつりこもらひをかめり、人の
このページのテキストは日本語です。
うとは、此雲井「ともの」のかりの御事なり。あまたの御子「こ」たち、出仕給ぶ。頃「ころ」は四月也。
さて、やかておなり月に、あかしの御はらのひめ君「きみ」、とくくに参り給ぶ。御つほねは、むかしの桐
「きり」つほね。御おおえ、かかてかをらかな。あまたの宮たちの御母「はん」、のまやは、とくくに立仕給ぶ。あかしの中くうとは、此御事なり。
かくて其年「そし」、源氏「げんし」のおと、三十九にて大和天皇「たいしゃうてんわかう」のせんし、かつふり
にておはします。主上「しゅしゅうし」は、人こそしらね、六つ上のせんの御子「こ」、れいさんるんにておはしま
す。御さを両「りよう」、はんにあるへきを、六つ上のるん、をにお「へい」、を、太政大臣「たいしょうだい
しん」の御さにせられたり。朱雀院「しゅしゅうさん」御覧「らん」して、いかと、あらしの御さをなさせ
給ひ、院「さん」の御さにひとしくさせられるやうのことを、れうけんして付「つけ」させ給へ。
かたにて、いつしか、かきぬけとこまようけ給へり。正月廿三日に、ねの日、源氏ののあんの御かたへ、ねのひ
のいはひに参り給ふ。御ゆうふかく、さまるにててたかりし。玉かつの為、
73かか葉さ参野へ小松をひきつれてととのはめにうるけふか
と、およ給へり。六条『とう』の院『めん』の御か
と、よみかはし給へり。此心は、源氏『けんし』の御御
はかの年『し』より、十にみふるし毎『こと』に、いましか大はせをこなひ、
一家『か』の一大事『じ』にいのりをする事なり。これによりて、内侍のかみ』玉かつらの事『し』、御子『こ』にし
給ふへなれは、ねの日によてておはしたる。子『ね』の日とは、正月のはつねの日は、子日『ねのひ』とて、
野へのあそひ、かかそなふる事あり。これに若葉『かか』のあつものあり。心へし、さて程へて内侍の
み、おはしたてまつり給へり、いとねひまさより、物々『ものの』
に見るかにあり、といふ事、くるしからす、玉かつらにあるへし。源氏『けんし』のの
はん

毘、藤『ふち』のうらに、あかしの中宮『ちくう』、とくくへ参り給ひて、めたかかりし事なり。又、
宮『ちくう』、わかみやうませ給ふ事あり。これを、あかしのうらにとまろし入道『にうたう』きったたへて、
いかはかりか、うれしきやけで、此よのねかひも、いまみちぬる』と、かひ山上にこそりて、みやこのすすめの
もとも、北『か』のかたのうはきのもとへ、こまるときかきまへ、
かとににて、たてをたする頃書『にかんしよ』と、文はこに入れ、ふうして、のほせたまつる。これを源氏『けんし』
御覧「ラン」してこそ、すみやし参りといふ事は侍「はん」れ。此あかしのうへをまうけんとて、見たりし夢「ゆめ」をも、かきたり。入道のうたに、「夢」を、「ゆめ」や、かきたり。「あかしのいはや」なと云事あるへし。

其頃、女三「にやさん」の宮「みや」と聞えは、朱雀院「しゅしゅうくんぬん」の姫「ひめ」宮にておはします。あまたの御中に、院「むん」の上やきりなく、いとおしみおほしめて、六条院「むとうむん」に、此宮「みや」をあつけたてまつり給ふ。六つの「むん」、御年「もと」四十の二月なり。これぞ、この巻「まき」の下に、かしば

木のあみのかみに名「な」たで、かぼる大将「しゅうう」をうみ給ひし人なり。「いつより源氏は、かよび給ひけるそと、と事あらは、わかなの上、よき日えらび、六つうの院「むん」へうらり給ふ。新殿「しんてん」に、しつらびて、大臣「しん」の御へにさたまります給ふに、御とし十五にてむかへられ給ひし。心えへし。

若菜「かかね」下

は上に、わかなのいはれあれは、おなし事也。此巻には源氏「けんし」すみやし參り給ふ上に、中宮「ちゅうう」に、春宮「しゅうう」のあかしやうぶけ絵といつるる宮「みや」、五にてつくとにかせ給ふ。御ちとの春宮「しゅうう」は、朱雀院「しゅしゅうくんぬん」の御子「こ」にて、おはしど。なに事も、すみよしの神「かみ」の

めくみの有かたくおとれて、むらさきの上、あかしの上、はのあまうへ、女御「むこう」の宮「みや」なとおは

きに、たかやにかさして、大ひとりまひて入る。まつばらに、はるくとたてつけた御車「くらま」、是
みな神祇に「じんぎ」とすみよいして、むかしの頃、「すま」・「明石」・「あかし」。なにのはのかたさまを見やりて、心し。

「まき」に六条院「たうのあん」にして、かすめるれ、はるの折し、おもしろきに、此御かたの庭「は」に入されし、みるけなは、みのむかは、みうちの見え紡ふ。その折より、やまひとなり、あささましかりし事なり。つるに此宮「みや」ゆえしか

春のゆふくれ。まり。ねこのつかふ。たちすかた。もやのはしら。

さて、あものかみ。此宮「みや」のめのとに小侍「こしひら」といひ仍女房「は」は、さるたよりなりは、かたはずして文をやる。そのことは、「みかかはらを分、わけ」かねて、風「かせ」にあたりて、それよりも心わ

ひしく」な、かきてやる。小侍「こしひら」おもひよらぬ心して、「あははげらし」なとはかりかきて、返

事をやりしなり。はりかきとは、なをぎりて、心にもいらぬ事を云なり。かくて、小侍「こしひら」せ

められこうして、つるにあはせ紡ふ。頃は四月かし。そのころ、むらさきの上、はやみ紡ふれて、いと大事「じ」

におはしければ、院「あん」もひたすらに打たれて、此御かたにおはしませは、よきひまつくりで、あはせせめし

なり。やかて程なく、はらみ紡ふ。これを、けんしの御子「こ」と号「かう」す。たとはならすやませ紡へは、むらさ

きの上の御こととにさしあひ、又いかなるもと、心くるしくおもひ紡ふて、源氏「けんし」おはしましたれは、宮
みやは、さすぐ空をそらおそれく、かなしくあひ給ひしなり。あはんのかみちをゆめと見るよし
をかたり給へば、さはことをほしめして、御目「め」をも見あふれさせされおはしませは、此程のことはうら
み給ふにや、おもひなくささ給ぶ程に、いとあつぎこられは、夕風たてて、むらさきの上の御かたへ帰り給ひ
なとし給へば、女三「によさん」の御なごりしおおほしけん。御とめ有し、ことのはほんか。
늳夕やはみちたとくし月まちでかへれかせこそちたまもみ
「月まちてとも、かふなる物との給へば、「其まにもや」おほしめすを、いとおしくおほして、その後はとま
り給へば、さらんには此事あらはされさましと、いとかなしなくして、朝「あさ」すみの程にかへり給ぶに、けん
し、あふきをおとさせたまひて、もとせきせ給ふに、御しとねの下「しつた」に、「あさみとりのうすやうにかきたる
文を、しぐさまつるはしべ見ゆる。あやしくおはしごひて、御かみまにと御覧する所にて、御覧されは、こまくと
かきたるに、まかふへくもあらず、かの中納言「いすなこん」の手にて、たまさかにあへたまつり、心のまくさ
らぬこひのくるさなど、かきたるなり。けんしの御心のうち、いかはかりか有けん。小侍従「こしひし」かかき
みなとちて参りて見てまつれは、きのふ、かのかたより参りたりし文の色「いろ」のかみを御覧するよつ、な
みとりのうすやうの文。しとねのした、あらはる。
みたなれては、かこつかたもなし。その程のことは、
に、宮「みやく」にとひてまつれは、「いさとよるしょのに、院「むる」入せ給ひしかは、しとねのしたに、をき
たし」との絵に、よって見るに、なにかあらん。小侍従「こしひし」かかくと申せは、宮「みやく」たたし、な
といふ事を付へし。それよりず、けんしは人へはかりにて、つるに其後「そのち」は、あひ給はす。人じれぬ
御心のうち、さこそとあはれも、あさましきなり。
さて、わかなの女楽といふ事。これには二女「にょさん」の里、みやり、いま、ゑもんのかみにあはざりしまして、

宮、つとめて参り給ふ。けんしももところにあはさめは、さりともさきをらし給ふるかに、御うるしろのことのありし、

しらす言葉、きく、給ひて、もとよりえさげ給へは、御ままにて聞くれ、ところある程に、とり立たてて、よる

ひる、ならはざてまつり給ふ。いときとし心も、ならびと給ふぞかし。「霊」はかか、つたへたる人

もなし」と、ほめるもつどかし、うちと心みも、正月にふるるで、春の夜のとかにすむ夜、御か

りとくへて参り給ふ。三女「にょさん」の里、みやりのきんの御琴、むらさきの上はかこ、女御はさきの御相

と、あかしの上はひね、源氏「けんし」はむかしと給ふ。ふれは夕「ゆふ」の御子、ひくろの大将

と「やう」の御玉「たま」から、の御腹、「はら」の子、これ、いとおさくして、さうの笛「ふえ」、ふく給ふ。さ

でつれもおもしろく有りなり。

其の町の御すかふを花にたつふれ、まつ、女三「にょさん」の里、みやりの御かたは、二月の十日はかり

の青柳「あをやき」の、はつかにしたりはしめて、うくひすのは風にもたれたへし。御くしは、ひたるみきより

これかくして、柳「やなぎ」のいのの春雨「はるさめ」にたれた風情「ふせい」なり。女御のきみの御すか

たは、こうかきふ「みな」より、ありにたらふ花なく、さきほほねる藤「ふち」の心はし、よしありて見え

しろは、さくら、梅「むめ」にたへても、をこをもとにすくられ、けに、ゆふなる御さまでり。かかる中に、

明石「あかし」の上は、けおときげるへられ、ありまほしくもつてつて、さきの花たちはなも、みくしと、をし

おたる心ちする。こまの青地「あをち」のにしきのはしさしたるしとねに、みっかからおはす。ひねをうちをきて、
たはやかな、つかひなたなる 취두と、よくより見るは、なをまぎりたり。これにを、ことによりて、よそへつく
へし。

又、此巻「まき」に、おちはのよさをとし「いふ」事。有。是「これ」はあまののかみ、わか北「きた」のかたに、
もたらてする。此女三「によさ」の宮のあねそかし。御はい、其すちもなき下「け」らうのかうなり。朱
雀院「しゅやくさん」の、にし山に御くしをおるして、うつはせ給ひしより、女三「にやさん」
の宮「みや」をえはる給へは、さておもひみてより、なかめて、「女三」の宮に、さもおとり給へるかしと
とよみより、此宮「みや」をおははの宮と申。すかたかたち、こともなく、しめやかにおほせし人なり。小野
のちにすみ給ひより、小野のちはの宮「みや」と「いふ」事もあり。心得べし。

二十一、柏木「かしはき」

此巻「まき」、かしは木と云「いふ」事。月賀雲宮「けつけいうんかく」を、月「つき」、日「ひ」、星「ほし」

雲「くも」かすみ、まつ、よろづの木草「きくさ」になぞらふに、あまののかみを、かしは木とよみたり。

坡。此人、女三「によささん」の宮「みや」の事ゆへ、病「やまひ」かきりになりて、いまはのおり、大納言

「たいねこん」になさる。此人し、たる事は、こひとひ、けんし、すこし其心をほのめかして、酒「さけ」をし
るて、御心よりぬ御めつからし給ひしより、心のおにいや、いとししく心かきみたれしより。挿、かきりのおり、
かの侍従「しほう」をよびて、宮「みや」へ歌をたてまつる。79たそそいてきやし、ましましみきことをおもひきたる、けふりくらへにありしをこそ、女三の宮の「けふりくら」をは申へれ。かしは木に、たとしもあることは、かれの病「やまひ」のうちに女三「にようさん」の宮、かほる大将「しやう」をうみ給ひしなり。源氏「けんし」は、かれの大将「しやう」をさた、かれの大納言「なこし」へきり、いと病「やまひ」あんの上へ申給ひて、御父「ち」あんの上へ申給ひて、いかなるふるふるに、さしもはかなくよはき御心をし、女三の大将「しやう」は、かれの大納言「なこし」のいもうとむこそかし。雲井「くもね」のかかりは、いもうとなり、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへ、人のなきひまにさしより、かの若君「わき」を源氏「けんし」かきいたきて、女三の宮の御ぞはへの SOURCE: 『源氏小鏡』 (神戸親和女子大学附属図書館蔵) 解題・翻刻)
この卷「まき」よこふえと云「いぶし」事。かの若者のかみの北「きた」のかた、おちはの宮「みや」を、ーー

条「とう」の宮「みや」とも申。かの若者の死「し」し給ひて後、あはれとおもひし中のかたみなれは、夕での大
将「しょう」かの一条「とう」の宮「みや」へ、あはれにかすかななるとふらひに、しばく参り給ふ程に、心ちなきにあらす。八月なかはのは月、ことにおもしろく、あはれなりしに、あこかふて出。大将」みや「出て、大将」しょう」にすし給ふ。此笛「ふえ」こそ古「こ」かの若者のかみ、の中のはまってもち給

ひて、まことにつたへてまらん道をの給ひしと、おもひ出るほど、ふきすささりたまふ。ふきすささらるるこふれは、ひ

給ひて、みすの内をわらなくす。め給へは、思ひをよびかほる八さうふれは、ひ

ふれは、「はんしきと見えてり」かくも、かたはらいたけれども、おちはの宮「みや」、
やへ参らせ給ふ。此宮、御くしろして後のちは、入道にうとうの宮みやと申。此入道にうとう
の宮みやへ、参らせられしなり。此若君わかつきぎ、とりもてあそひ所も、あひたりしかは、たけのこ
と云心な有へし。

鈴虫すむしよこ笛のならひ
此巻まきすむしと云いふは、八月十五夜の月のもしろくすみわたりて、かきりなくあはれなれ
は、六条院とうのおんはうなづきなふ知ひて、入道にうとうの宮みやの御かたへおはしまして、月
御覧するに、御まへのせんさいに、はなたれたるむしもの中に、すむしの花やかになきければ、入道にうう
の宮みやへ、

二十三、夕霧ゆふきり
此巻まきに夕霧ゆふきりに云へ、大将しやうの小野をのせて、よみ締めし
と、よみ締めし歌の故なり。月くまなく、ふりすてかたき、すむしのこゑ」と云へし、

87山さとのあはれたををふるゆきりにたつ出しらむかにき心地にして、

86こゝるもて草のやとりをして戸とてたまをすむしのこゑをふりすね

104
二十四、 御法「みのり」

此巻「まき」、みのり上、云事。雨、雨。雨。雨。

雪の上。なやみ大事「だいじ」にて。年ろく千部「せんぶ」のほえきやう、子こをなる、おはまをしぢら。御まちやうのぼうは、やよび十四日也。御ぼうじてけ、

花ちるさ、

89むしみをくちきりはたえ大かたのこすくやさきのりなりとも、しをかせふぶも、いとあはれにそ。さふらふかきのがやう、ねうほうと、又かたくも、あはれに有かた、

此三の宮と姫君「ひめきみ」をぞ、朝は「あさゆぶ」そたて奉り給へは、見奉らん程の事、あはれにて、五六に

り給ふ三の宮「みや」を、御まへにすへ奉りて、「我はかなく成り」たらん時は、此だいにすみ給ひて、此紅
梅こうはい」と楼「さくら」とは、かつみに取「となり」をき見給へとの給へは、おさなき御心にも、いたるゆ

しに成「なり」給ひて、御袖をさくく引立て給ひぬ。明石「あかし」の中宮「ちうこう」の御はらの姫君「ひめ

き」をも、むらさきの上のやしなひて、六条院「てうのあん」のはるのかた、むらさきの上のたから物つり

えて、明石「あかし」の一品「ほん」の宮と申て、すませ給ふ。拝こう、すさまても、にはふ兵部卿「ひやうが

やう」の宮「みや」は、此たに住「すみ」給ひなり。

かかって、むけに頼「たの」もしやな成「なり」給へは、中宮「ちうこう」の宮に給へは、中宮に対面「たいめん」給へは、院「あん」御まし御心のうち、おもひやる

と、よみ給ひなり。

よつに聞くほそはかなきともすれば風にみたる「さぎのうは露

90をくと見るほどはかなきともすれば風にみたる「さぎのうは露

かてを日をへておもてへて、八月中程「なかほと」に、かくれ給ふ。院「あん」の御かた御心のうち、おもひやる

作法「さぎは」なときあるに、ふわりかみのむかしより、てなれ給ひて、いまはとさきおりしびけん、明「あけ」く

れの御心より、夢「ゆめ」まほろしとも、わきまへ給はす。日ころなれつかうまつりし人々、さへにおもひやく

たもなし。物おはたる物の、なけかばは、一人もなし。中院「あん」は、御心つよくもてなし給ひて、大

将の君「きみ」八丈きりし「ちうこう」の給ひあはせ、ことわくをこなばせたまふ。此大将、むかしの野分「のわか」の

を、忘「おぼえ」れかた思ひ奉りて、今「いま」ならてはと思ひて、なに心なく打ふし給へる御かほを、つくる，
とまわり給ふに、い・ひかりさそふ心ちて、むなしき御からに、我たまらる心ちなして、はかなかりし也。

たさむく、吹「ふき」しをりたる「ゆふ」くれに、父「ち」のとより、御子「こ」の歳人「くらんと」の少
て、よみ給ひなり。

此御なけきより、みすのとへも出給は、ただ、おほしめしうれたる人に見えは、をこかましかりなん事をおほ
しして、是「これ」や甘泉殿「かんせんてん」をいてやら、へうはうとして夢「ゆめ」にたる心ねそかし。

このむ中宮「ちうくう」の御つかひあり。六条の宮すの御むすめ、秋「あき」

秋のすえかたをとよ、秋「あき」このむ中宮「ちうくう」の御つかひあり。六条の宮すの御むすめ、秋「あき」

此むらさきの上は、春「はる」の明「あけ」のにてて給ひし心に、かくよみ奉り給ふ。いと心ありてそ、おほえ

94のほりにし雲「くも」井なからもかへり見よわれあきはてぬつねならぬよに

御のりには、た・いつくまても、年「とし」をへいわかれのかなしき心をすへ。此巻「まき」中「く」こととはもな
二十五、幻【まほろば】
此巻、まほろばと云事、源氏【けんし】此御おもひになけしきしきつみ給へて、そらを打なかめ給へて、かくれつびて又のとしの春【はる】のひかりを見給ふに、春【はる】に心をしめ給ひしき事を、おほしめし出て、あはれなるに、三の宮【みや】の、かのかたみの赤梅【こうはい】に、うくひすの嘆【なき】けるも、「しらすか

ほにて」と、なかめ給ふ。

98 我やと花もてはやす人もなしなに、か春のたつねきさらん

99 かをとめてきつつかるひなく大かたの花のたよりといひやなすへき

97 いまはとてあらしやはてなき人のこるるゝめし春のかきを

96 うへて見し花のあるしげなきやとにしらすかほにてきるうくひ

95 おほそらをかよふまほろし夢にたに見えこを、玉のゆくあたつねよ

と、よみ給ひし故【ゆへ】なり。
あはれなり御心なり。まほろばの春「はる」は、かたみの紅梅「こうかい」桜はに雲事あるけり。

「みたれになりて、いと美なるなさき御心なり。大相「えいよう」の君「きみ」参りたまひて、御物かたり申給へ。」

又賢茂「かみ」のまつりに、いにししのみあり。おほし出て、さかしきければ、中将「ちうやう」の君といふ。

女房「ねうはう」、むらさきの上の、心ことにおほしめしたりし人なり。源氏「けんしし」のひくおもひ給ひしか。

かたみ、おさなきやあり、おほしたて給ひしは、ことのほかに、おたてまつりて。うらとけ給はす。御かたみとあれば、此人はかれは御覧「らん」しはたれすかと、おほしそへ。

まつりの日、たれねしたる所へ、おはしましたり。おきあかたるに、かたはならるあふひを御覧「らん」して、いかにとや。此なこそ、わずれにけらしのこゑ、きを与ふに、源氏「けんしし」。
九月九日には、わたおはひたる菊「きく」を御覧しても、「ひとりたるにかえる秋「あき」かな」と、かきつりしを、御観しける御心の中「うち」さこそおはしけ

神「かみ」な月には、大かたの空「そら」もれまなく、あはれもふかくて、「ふりにしか」と、うちなかれて、

十一月、豊「とよ」のあかりには、人しれす、むかしの御事おほしめし出て、日かけもしらす」と、ここひふ

。「かきふれ」の唐松「きぶき」のあかに、かきつりしを、のひふに、かのすまの短の折、所々「ところら」よりたてまつり給ひける中「なか」に、かの御手「て」なるは、

からに御わかれたなも、かけき給ひけんよと、おしあげ給へるに、おつる御なみたをまきらかし給ひて、

「いかならも道「みち」までも」とや、おほしめしけん。まきあつめ、ひきゆひて、かき付「つけて」給へる。「け

し、まごかにかき給へるかたはらに」とき、他本「たほん」に有。か様「やう」にかきつれて、みなやか給ふと見
えたり。

106 かきつめてみるかもひなしもし草おなし雲井『くもくけ』のけふるとをなれ

寒さに夜のひとりね、いとさかにさかなくし。

おこして、御火『ひ』をききたてまつる。

おうの宮へわたりそめ給ひしほしめ、心はしきも色にいたし給はさりしかとも、あらぎなのわさやと、ことにふ

立たちやすらひしに、身さへしみこほりたりしに、なきぬしらるる袖『そて』を、ひき返『かへ』し給ひお

ひし人々の袖『そて』も、心せることはかりにや。

ふむ、『御火』ねえっ、ふみやうなり、ことしはかりと、おほしきるにや、うしにさかふきおにぎりいと光『ひかる』やおありしとかし。

つらし、さかつきのるてに、かかる事、有き。

107 春『はる』までのいのちもしらす雪『ゆき』のうちにいろいろつ梅をふかさてて

と、よく給ひしにそ、雲かくふれの御心なりりる。正月のひきけ物

上達部『かんだちめ』などの物まで、調『と』

なれ

之れもおもしろけれも、取わきたる事なし。
二十八、雲隠「くもかくれ」

此巻「まき」、よにふらさ、大かた同前「こうせん」のこと葉なり。光源氏「ひかるけんし」と申せは、雲隠遠報、かくれのようたよりなり。

十七、かほる大将「しゅうう」共、にほぶ兵部卿「ひううふきやう」共、

此巻「まき」、かほるとき、にほぶ兵部卿共、云事は、三の宮と申し、むらさきの上やしわたてまつりて、梅

『もめ』、さくら、ゆつぎきし、あかしの中宮「ちくう」の御はら、源氏「けんし」の御まことの宮「みや」、けんふくし給ひては、兵部卿「ひううふきやう」の宮と申。御かたずくれ、御心はやかに、うつくしくおは

申し候なり。

かほる大将「しゅうう」とは、かの女三「よさん」の宮の「若宮」、かわみや。人えは源氏「けんし」の御子「こ」、

まことには、かしは木の大納言「ならん」のこそかし。此君「きく」も、けんふくなんとも、けんし、れいせんの

申をきき給ひて、冷泉院「れいせんのるん」にてさせ給ふ。源氏「けんし」なに申も、申をかせ給ひしが

は、よのおへく、かろかつら。院「あん」ののみさふらひて、いとたたしえなく、おひたち給ひける。のつから,

かうはして、此世のかはりならす、あたり有かたけは、「三の宮」、みや、うらやみ給ひて、わさとこのみで、春

「あき」はかれゆくふちはかまをにほほす。紅菊「こうきくく」まても、にひをあつめ給へ、香「か」をなつかしみ、

秋「あき」はかれゆくふちはかまをにほほす。紅菊「こうきくく」まても、にひをあつめ給へ、わさとこのみで、春

のつから、御かたずけ、源氏「けんし」の御後「のち」には、たちついき人の心をもたしえ給ひし。されば、ほとけのかく
御しくておろして、すみ給ふ。いつうつしくひめ君「きみ」一人、おちたてまつり給へり。みすてかたおは

御しくなからて、ぞくははせ給ふ。大た此宮「みや」は、諸道「しゅたう」のたしやにておはじける程に、か

此卷「まき」に、「有明「ありあけ」の月をまねく」とひて、よろつつやさしく、おもしろさる事するることあり。を、いかにしてなれ、ゆかしくおもふ程に、ふかきあきは、まじて山里「さと」いかにおもひやいて、此宮「みや」へおもひたて参る。道「みち」すから、山ふかくなるまに、風「かせ」のと、ひやかに物さびし

にて、いかにしてなれ、ゆかしくおもふ程に、ふかきあきは、まじて山里「さと」いかにおもひやいて、此宮「みや」へおもひたて参る。道「みち」すから、山ふかくなるまに、風「かせ」のと、ひやかに物さびし

近くならせ給ふ。其ま、宮「みや」はしばりにて、ぞくからこなのかはせ給ふ。大た此宮「みや」は、諸道「しゅたう」のたしやにておはじける程に、か

かふへからす。
たてまるうれしきよてて、たてまつり、とりてみ絵へは、ふうきたるうへに、上といふもじかきたり。あく

うの句くをは、付つけさせ絵へし。此巻「まき」しらかもの、かほるの歌に、

とふ歌「うた」のゆへなり。此うはぞく、かくれ絵はん程近ちかくなりて、かほる

のいの邦絵「うち」にて聞し身のはじ姫ひめきといふや

うの句くをは、付つけてさせ絵へし。此巻「まき」しらかもの、かほるの歌に、

とふ歌「うた」のゆへなり。此うはぞく、かくれ絵はん程近ちかくなりて、かほる

のいの邦絵「うち」にて聞し身のはじ姫ひめきといふや
三、緒歌 [あげまき]

此卷「まき」にあけまきと云事、かほるの歌うたに、大君「きみ」にみみてたまつりなり。

14 あげまきになかききりをむすひこめおなじ所にやりもあはなく、とふ歌のゆへなり。よめる心は、うばそくの宮「みや」の一めくの御仏事「ふしえ」、姫君「ひめきみ」たち、

15 ぬきもあけはすろきなみたの玉をなかききりをいか。むすばんとの給ひて、つらに心よくて、うえ給ひしなり。御いもうとの君「きみ」をも心かけて、の給ひしかとも、あね

君「きみ」をふかく心かけて、うけひふ。としより給ふ中「なか」の君「きみ」に、いよりたれとも、あらさけは、いとつらにうめしれ給ふ。
『源氏小鏡』（神戸親和女子大学附属図書館蔵）解題・翻刻

千夜にたどりぬかたまひて、かへり給ぶ。句兵部卿「にほふひゃうふきやう」の宮「みや」に中たちして、あひ奉て後「のち」には、二条院「あたるのむん」のにしのたいへ、むかへ給ひて、わか君「きみ」なとまうけ奉りしなり。

「さおる、宮「みや」は御覧「らん」しはして、いとらなる御心にて、しばく「宇治「うち」へかよはせ給ふ程に、御母「はは」きさき、みかたなると聞「きふ」給ひて、此宮「みや」をは、すちことにおもひ奉り給ふ宮「まなふ」なるれは、かちく「しにく」ふふを、いさめのためまつりたまふて、「御心につく人あらは、むかへ給ひて御覧りなれ」のとみ、ふかくおもひ立「たち」給ふ。

かくて、にほふ宮「みや」は御心もあくかれはて、いかにしてかとおもび給へと、はるけど「みち」なれは、『さは、おもひ事なり』と、いひしらす

「まなふ」のつるに、あびるにあら「あち」のつるに、いひしらす「みち」は御あらびに御心もいらす、御中「なか」やよりのにみ、なかめやられ給へ。あちの宮「みや」のつらびて、ひとふが「しぶこ」のつらびて、ひとふが「しぶこ」のつらびて、ときして、すとらす「あち」のつらびて、ひとふが「しぶこ」のつらびて、ときして、すとらすのつらびて、ひとふが「しぶこ」のつらびて、ときして、すとらすのつらびて、ひとふが「しぶこ」のつらびて、ときして、すとらすのつらびて、ひとふが「しぶこ」のつらびて、ときして、すとらすのつらびて、ひとふが「しぶこ」

「あへり」給ぶ。
四、早蕨『さわらひ』

此巻『さわらひ』の緒は、その宮『みや』のたのみおほして念仏『ねんふう』などにこもり、今はおもはしましたりしきのほようより、中『なか』の君『きみ』、姫君『あねきみ』におくれて、たゝ独ひとりのたたまれる座に在り。『みや』のうえ絵しも、やったまきついて、姫宮『あねみや』のなげきをかなしみ給ふ。此宮『みや』のうえ絵しも、やったまきついて、姫宮『あねみや』のなげきをかなしみ給ふ。此巻『さわらひ』の緒は、その宮『みや』のたのみおほして念仏『ねんふう』などにこもり、今はおもはしましたりしきのほようより、中『なか』の君『きみ』、姫君『あねきみ』におくれて、たゝ独ひとりのたたまれる座に在り。
宿木「やとりき」

此巻「まき」やとり木と云え、からはの、うちのふるさと宮「みや」にてよみ給ひし、

とふ歌「うた」の故「ゆへ」なり。此心は、うちの大君「きみ」、失「うせ」給ひて後「のち」、とし月ふれとも、

とほる大将「しやう」、なけきふ「わす」、ねけは給はす。中の君「きみ」、にほの宮「みや」、としを

のきたのかたにおほせあはせ、寺「ときら」にまはし、かたはらにしめんてを立「たちて」で、時々わたたりおはしま

まになりてを、愛の宿もりにしな給ふに、おはしまして御覧「らん」しめくらして、つもぬれは、としりり

給ひて、よみ給ひしなり。

さて、この巻「まき」に、にほの宮「みや」、は、夕ゆふりよりのおとるの御むしぬめの宮にに、おつぎをした

と合「あは」世え給て、時めかせ給ふ。宮「みや」は、かのう「なか」の君「きみ」、かきりなくおはしめし

て、いつしか物をとはせん事をかしなく、心より外「ほか」になけ給ふに、たしいらすさへなり給ふ。八月はか
切り、夕ゆふきりの御かへおはします。返々かへすくも、山ちわけ出いてけん程ほととの心
かろさ、人やりなさす、くやしくおほしつめみて、けにあまもつりするはななる御枕
「まくら」を、そはたてなか
め出し給へは、有明「ありあげ」の月も、やうくすみのほりつめ、ひやかなる風のをと、
むかしのあさまかかりし山とをさるるより物くくて、よう給ひ

118山さとの松「まつ」のかけにもかくはかかり身にしむ秋「あき」の風はかなり
と、よう給ひしなり。あさまかかりし山里「やまと」のすまるよりは、都「みやこ」

のうらめきにほおにとり合「あは」せて、付させ給ふへし。

との程に、宮「みや」と、か様「やう」に夕ゆふきりのおとにに、かよはせ給ふひまに、かほる大将「やう」

にての事なれば、かの中将「ちうしゃう」の君「きみ」をは、御このことくおほしたる事なれば、つねに此宮「み
や」へおはしなよび給ふ。世中「よのなか」のうらめき物かたりなとして、ふくまるまでおはして、いかに

ありけん。まことにはしらねも、はひよりして、れいのうつり香「か」、しずかきを、宮「みや」、とかめい
てうらみ給ふ。打「うち」とて、心やすきかたなれば、宮「みや」も、のとかにおはしまして、ふかき秋「あ

黄鐘調「うしきとう」のしらへ、ひすきさび給ひて、よみし歌「うた」。

119ほに出ぬ物もぶらしのすきてきまくたものとのし出でしして、女君「ひめきみ」の御返事
と、よう給ひしなり。さて、女君ににおいて、しばをかへすけん程。か様の事を、

ことにはとりし。
六　四阿屋「あつまや」

此巻をあつまやと云事、かほるの歌に、

としあたのゆべなり。これ故は、みやのきたのかた、かほるに雲「かた」り出し給ひたりしほめきみを、母「は」、

しくおきして、宮の北のかたの御もとつけてゆきて、あつけ開「きこ」を。此北のかた、御ゆうと云「うち」へおはして、かの弁「へん」のままを先「まつ」やり給ひて、我「われ」も、あの三条「じょうのたひところへはしたリ。のあり、東「あつま」

かくして、そのあつしき、かほ御車「くるま」にをのせて、宇治「うち」へつれておはして、ますせ給ふ。たひの


しの藤「ふち」のさかりに藤「ふち」つふにて、藤の宴「えん」し給ひて、やかてその夜「よ」大将「しゃう」

の御もと、宮「みや」うつろはせ給ふなり。その夜「よ」の笛「ふえ」にて、かのあらこのかみのつたへ給ふなり。
七、浮舟「うきふね」

治「うち」へかよはせ桜

「うきふね」

此卷うき舟と云事、うき舟の歌「うた」に、

tachiはのこしの色なかはらしをこのうきふねせやくをかかぬるきなひて、治「うち」にとりをきて、時「とき」々

かよひ程に、兵部卿「ひやふきやう」の宮「みや」、かの北の御ゆのに、ほのかにみ給いし人を、いかなる

人やらと忘「す」れかとき秋「あき」の夕「ゆふ」くれて、北「きた」のかたに、とひたてまつり給へは、

とかれいひまきらはしてすきゆく。

又のとしの正月に、宮、此御かたへおはしまして、うちとけへおはしませぬに、治「うち」よりとて、うつれ、

ひけこ、まつに付「つけ」て、文をととし、て、御まへなるわらは、もてて参りたり。宮「みや」、いくつよりの

文にかとて、うたははしさに、ととりて御覧すれは、いとわかやかなる女の手「て」なり。あやしくおはす。大将

「まつ」はそきあより、のそきて御覧すれば、「わかきたの方「かた」にもおはえたり。人しつまりて後「ち」

大将「しゃう」のおはしましたるまねをして、「みちにて、いみしくはちかしましき事あり。返々、人にしらす

まし」と、さやかせ桜。御こゑ、いとよくまねび桜。ぬれしみりた御にほひなとも、まかふへくもなし。

右近「うこん」と云「いふ」女房「ねううう」、出「いて」てつかうまつる。㧾、ときやの内へ入ても、たゝ大
将「や」のおはたるときおおひて、うつとけぬれは、あらぬなり。浅「あさ」ましくおほしめせとも、かひ
かれ給へは、女と、おもふとは是「れれ」をいふやとおばして、いよつ空「そら」おぞろしくかなしれ
もしく、うらぶかきあつまきに、おきかわれ給ふ。御馬「むま」にて、かへり給ふ。そのおり、宮の御歌「うた」
128なみをのぼとなき袖「そで」にせきかねていかにかかれをといむへき身で
なかでも猶こひしは、せんかたなく、にどふへきやらなくて、みや、御物にみ、にがやかとこつけて
にのり給ひて、さしわたすに、はるかなるきしに、こきはまれたらにちし、いと心ほそく、有明「ありあけ」
の月のすみのはりて、水「みず」のももてももなりきに、「これなれ、たちはなの小嶋」と申で、
御舟「ふね」さ
しとめータるを見絵へは、大やかなる岩「いは」のさまでして、されたときは木のかけ、しけれどれ。『かれ見たま

択「さて」、舟よりいたきおろさせ給ひて、御やとりにて、御心しつかにおはしが、ありしきすいりめして、御
あらかときすきさひて、女男「ゑのなおとこ」もろともにうちそひたるをかきて、「つねに、かくてあらはや」と、
御なみたうけての給し御おもかげ、いと、ささこそ忘「おすれかたくありけり。此いあに、あしきら屏風をたて
と、そのことは、すりり。ゑ。やと。川よりをち。あしきら屏風「ひやうふ」。

その後「のち」、かぼる大将「しやう」は、まもをなるを、さらぬやうにて、うらむにこぞと心にしるしくて、「こよなく、もてつけた
大将「しやう」は、まもをなるを、さらぬやうにて、うらむにこぞと心にしるしくて、「こよなく、もてつけた
さめ給ふ。かぼるの歌

130字治「うち」はしのなかをいちきりはうちせしをあふむかたにこりさはく
と、よみにしり。かくて、二三日してかへり給ふにも、おもかげはしきしむらはふに、いとおかしましり。
のたより、とある人すへなとして、いといしきしくてます。きいいききらめて、大将「しやう」のもとより、かの
さま、あらししごりの文の色「いろ」は、さくらに付して、あかきしみきも。「あらはる」事・などあは、「さく
ら」に付し、なけどい文をつけて、さくらにし、ふねの山たじにいれ、侍従「しやく」、おもに、きしみて、内へも人をうけ、とかくいひて、御つかひ、近にあひた。出へ、きや、
うなけは、侍従「しょん」頭、右近「うこん」おおし心なる女房「ねうはう」を、宮「みや」おはして、案内「あんな
し給へとも、どのより、きびしくて、内へも人をうけ、とかくいひて、御つかひ、右近にあひた。出へ、きや、
うなけは、侍従「しょん」頭、右近「うこん」おおし心なる女房「ねうはう」を、宮「みや」おはして、案内「あんな
し給へとも、どのより、きびしくて、内へも人をうけ、とかくいひて、御つかひ、右近にあひた。出へ、きや、
九条あたりなる所うちつのはせんと、人しれすかまへ給へは、女は、「いかか、なりはつへき身にか」と、こか
れ給ひて、「とにかくに、わか身をなき物にさかはや」と、おもひなりけり。ことはなりりや。かは音「トと、波
のあまをきくに、わか身のをき所とあはれに、うすきぬに、はかまはかりき給ひて、人のねたるまに、
をふみおろして、「鬼をや」おににても神「かみ」にても、われをつれてゆけかけ」と、なき給ひたるに、かの宮
をふみおろして、「鬼をや」おににても神「かみ」にても、われをつれてゆけかけと、なき給ひたるに、かの宮
みや」とおぼして、おとこの直衣「なをし」すかたなるか出きて、「いらっせ給へ」と、なき給ひたるに、かの宮
は、こたまなり。とりもてゆくほどに、平等院「へとうるる」のうちに、小野「をの」のあまは、つせより下向「けがる」に、
ひきつけてとりて、小野「をの」へゆきて、ようくからし、なをさせたはりて、人とねし奉りて後「のち」にとらし
たりしを、小野「をの」のあまは、つせより下向「けがる」に、こたまなり。とりもてゆくほどに、平等院「へとうるる」のうち
に、大なる木の下「した」にとらし「のち」にとらし、
あまになりしき。さらは、「宇治「うち」に【木玉「こたま」」といふ事もあるべし。木玉「こたま」にとらし
ころは、三月のすゑの事なり。
九、手習「ねらひ」

此巻【このまき】てならひと云事は、うき舟【ふね】小野【の】のあまにつれられて、小野【の】にすみの木【き】の下にしたに、あやしき物【もの】なり、人をしるるを、行なくをも、見れば、いとうつしくきわまきの女【をん】なき、あやのうつりか、なへてならぬ赤【あか】かなりまきたり。此あま、はせにて、ふしきの夢ゆめを見たりと、此ひしりに、かちせさせなとして、つれ行なくをも、ねらひをもてなし、いををしめ給ひけるに、此あまのむすめ、はかなく成なり。なりたしか、かのむこ、むかしを忘わすれす、小野【の】へつねにきけ

か、此人をみて、むかしの御かはりにと、しきりにいひわたたりけを聞「き」給ひて、むつかし事をお
なりける。
かくて、さまく、都「みやこ」の事ともおび出し、身をなげんて出てたりしに、宮「みや」とおもひし人
につれてゆくと、みしはとより、身のゆくすはしらす、いかなるけんと、浅「あさ」、ましくおもひて、歌「う
た」に、

133 身をなげしなみたの川のはやきそをしからみかけてたれかと、めし

月のおもしろきに、つくくなかためて

134 こらには秋「あき」のゆふへをわかねとなかむる袖「そて」に露そみたり、

秋ふくらなるゆけは、大かたの空のけしきもあればなるに、まして物思ふ袖「そて」の上おもひやるへし、

所は、かの夕きの宮す所おはせし山里「さと」よりは、今「いま」すこしりきて、山にかたかけたる家なれは、

松「まつ」かけしきく、風のをとも、いと心ほどし。門田「かどた」のいねかるとて、若「わか」きをなさるも、

うたび物まねひしっ、ひたひきならすも、見しつたまの心ぢてあればなり。月のあかき夜、うちなかためて、

ことにおれつ、宮「みや」の御おもかけの忘れぬ、あしさま。さりとも、忘「うす」れはて給はしとおもふも、

136 梅の色「いろ」もでき、かはらぬも、春「はる」やむかしの」と、ことはなよりも、これに心よせし。

春「はる」に成「なり」ぬれは、いと昔「むかし」の春「はる」のこひしくて、ねのつま近「ちか」き紅

梅の、色「いろ」もかも、かはらぬも、春「はる」やむかしの」と、ことはなよりも、これに心よせし。

のことはをおもひて付給ふへし。
此巻「まき」ゆめのうきはしと云事、源氏「けんし」わか身にしの栄花「あいくを」をはしめ、御身のさへもよこえ、品「しな」たかくぬれ絵製にて、御かたちは、ひかるとさへはれ絵製にて、御心にいみししくおはせしふ。

又、か様に、こと葉「は」おくほくくうくいたせは、物かたりも、はてはみな無常「むしやう」をしらせぬ事も、たと夢「ゆめ」のうきはしとはいふなり。「はし」をことのはのやすめに、夢「ゆめ」のうきはしとはいふなり。

さて此巻「まき」に、大将「しょう」きいたし給ひて、此手ならひの君「きみ」のおとし、ひたちのかみか子「こ」を、むかしのなささめにし出して、つからせ給ふを御つかひにて、御文をつかはる。しるへなくてはいかとて、かの人のをあまになさなとせし僧都「そうつ」におほせて、文をこひて、大将「しゃう」の御文にとぞえてゆきしなり。大将「しゃう」の御文に、score法「のり」のしにたつぬるみちをしるへにておもはぬ山にふみまつふか。

ありなしからの御手にて、御にほひもさからなるを見し、手ならひの君「きみ」の心の中「うち」、さくそ

その「うち」「山の露「つめ」」といふ物を、人の作「つく」にて、たつねあひて対面「たいまめ」し給へり、と作りて待り。それは、五十力帖「でう」の外なれは、是にはなし。

夫「それ」、生死無常「しゃしむしゃう」の雲「くも」あつし、本覚真如「ほんかくしんにりょ」の月、出かた